
超劇場版ケロロ軍曹 魔女と戦場の赤い悪魔との約束

慧螺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超劇場版ケロロ軍曹 魔女と戦場の赤い悪魔との約束

【Nコード】

N4685V

【作者名】

慧螺

【あらすじ】

反ケロン軍の反乱から一ヶ月・一本の電話が日向家に鳴った。それが今回の事件の合図だとはまだ、皆思っていなかった・

予告（前書き）

ギロ口総受け前提です

予告

遠い・・遠い昔の約束にして、それは叶えられなかった約束の続き・

・

悲しくて、それでも魔女は願った一緒にいたいと。赤い悪魔はその約束を果たしに彼女の元へ

しかし、それは悲しい物語の序章。

レイド人

人造人間の姉弟。

護りたい者達がいるから、赤い悪魔はそこから離れた、そして、同時に約束が果たされようとされる時でもあった。

「ギーくん・・ボクはボクじゃないんだよ・・？」

魔女の兄の願望も同時に進行するとは知らずに・・

劇場版ケロロ軍曹 反ケロン軍来襲！〜今明かされる闇の歴史〜から一ヶ月後の事件をつづる！

「それはマジジの願いではない。マジジの願いを捻じ曲げた貴様の望みだ！」

第二弾！超劇場版ケロロ軍曹 魔女と戦場の赤い悪魔との約束！公開！

予告（後書き）

ついに公開することになりました・駄作ですがよろしければ見て
ください；

キャラクター紹介（前書き）

題名どおりキャラクター紹介です

キャラクター紹介

登場人物はおなじみ原作からはケロロ小隊・日向家住人・ガルル小隊が出場。

オリケロでは前作敵として登場した反ケロン軍幹部が登場します。

オリケロなどが嫌いな人は回れ右！です！

1、ケルル統帥　口が悪いが指揮力は隊長の素質並の実力を発揮する。実はケロロのクローン

2、ロギギ　幹部の中でもケルルの右腕。ムードメーカーでよくケルルに苛められてる。ギロロとガルルの混ざったクローン

3、タナナ　同じく幹部の一人。垂れ目なのがチャームポイント。タママのクローン

4、ルクク　同じく幹部の一人。グルグル眼鏡、「ケケケツ」という笑い方が特徴。クルルのクローン

5、ゾルル兵長　幹部兼ガルル小隊暗殺兵。まあ詳しい経緯は小説にて。実はドロロのクローン

今回登場する新たな脅威&勢力

1、マジヨジョ　ギロロとガルルの従妹。今回では重要な鍵を握っている

2、ハギギ　レイド人。ギロロに手当てをされ・・・？

3、バイル　ギロロを兄貴と慕う。ティオラに異常なる憎しみをもつ

4、カガガ　元ケロン軍でガルルの同期。今回のことで暗躍する。

5、マジジ　マジヨジョの兄。ある日を境に軍をやめ、行方不明になっっていたが・・・？

1、ティオラ　バイルを追いかけて日向家に来てしまった礼儀が正しい子。

キャラクター紹介（後書き）

とりあえず、今のところこれぐらいです。反ケロン軍については前作を見てください^^；

消えた紅（前書き）

本編開始ですっ

消えた紅

平和な日向家に一本の電話が響いた。

K 6 6 視点

あの事件のから一ヶ月が経った・ギロロが目を覚ましたってことで反ケロン軍のケルル達は帰って行った。だが、時々来ており、各々楽しんで帰るという生活がここ一ヶ月は続いた。

夏美殿は電話を取るとすぐに受話器を持って、ギロロを呼んでと言った。どうやらギロロ宛の電話らしい

「?なんだ?」

「あんたに電話よ。すっごい知り合いっばいし」

夏美殿から受話器を受け取ってしばらくするとギロロは出掛ける準備をしていた

「ギロロ?」

「すまん、さっきの奴に会ってくる」

「ん。行つてらっしゃいます」

我輩が言つた途端ギロロは飛び立った。だが、その電話がこれから起こる事件のスイッチだとは誰も知らなかったし、我輩も知らなかった・・・

K 6 6 視点終わり

ギロロが帰ってきたのは翌日の朝だった。

「ギロロー・・・誰に会って来たんですか?」

「ん?ああ。マジョジョってお前らは知らんか?」

「マジョジョ・・・?・・・あー・・・確か、ギロロの従妹だっけ?体が弱い子じゃなかったっけ?一人でペコポンに・・・?」

「あ・・・いや・・・どうやら兄と一緒に来たといっていた」

「ふうん」

今は日向姉弟も学校で居ないため、日向家にいるのは居候たちだけだ。

「あ。そうだ、ケロロ、いきなり団子食べるか？マジョがお土産に持ってきてくれたんだ。タママたちも呼ぼうか」

「お、いいでありますな」じゃ、我輩タママとドロロを呼んでくるから、ギロロはクルルをお願いね」

「ケロロが言ったほうが来るんじゃないのか？」

「ギロロが確率は十分高い、十中八九来る」

鈍感なギロロはケロロの言葉の意味に気づかずにはクルルを呼びに行った。ケロロは残りの二人を通信で呼び出す。

十分後にはケロロ小隊がリビングに集まっていた。

「お茶入れてくるから先に食べてろ」

「ギロロー手伝おうか？」

「大丈夫だ」

言葉に甘え、ケロロ達は自分の分を取り懐かしい故郷の味をかみ締めながら食べていた

「ほら」

「ども」

「ありがとうございます」

「かたじけない」

「ども」

機嫌がいい四人がお茶を飲むと・・

ゴト・・・ドサツ

四人が湯飲みを落とし、倒れた。ギロロは焦ることなく、四人の落とした湯飲みを拾い片付け始めた。ケロロの部屋に四人を寝かすと、ギロロはテントに戻りすぐに出て行った。

反ケロン軍本部。クルルは多忙で仮眠すらまともに取れない状態だった。もちろん幹部のロギギたちも同義である。

「あゝ・・・ねみい・・・」

「お兄様、がんばってください！」

呟いたケルルの横に居るのは銀髪の少女だった。彼女の名はアングル・サラ。ケルルの義妹でアングル・モアの異母姉でもある。

「ケルル？いるか？」

「んあ？ギロロ？」

「ギン兄・・・どうしたの？」

そんな執務室に顔を出したのは反ケロン軍の幹部やケルルにとっては絶対的に護るべき者のギロロだった。

ケルルとロギギたちはケロロ小隊のクローンだった。実験途中で失敗し、違う人格が形成された。初めて外に出たときに会ったのがギロロだった。ギロロは自分達の光の存在であり、生きる気力になっている。以前ケロン軍は禁止された兵器、『破壊プログラム』をギロロに埋め込んだ。ボロボロなのをケルルたちが見つけ、保護した。ギロロは記憶喪失になり、反ケロン軍にギンロとして所属したこともある。サラがギン兄と言ったのはその余韻だ。

「これ、マジョジョからもらったんだ」

ギロロはいきなり団子を見せながら二人に渡す。

「へえ・・・懐かしいじゃねえか」

「これがお兄様の故郷のいきなり団子・・・」

サラは何か、感激している。二人して同時にいきなり団子を食べた。サラが倒れかけ、ギロロが支える。

「（やはり・・・疲れていたのか・・・あつさり寝たな・・・）」

サラとケルルをソファに寝かせて、毛布を掛けてやる。

「・・・すまん。」

出る時に呟き、執務室を出た。一階まで戻りギロロが出ようと思っ
っている。ロギギがいた。

「あ、隊長」

「任務帰りか？」

「ああ・・・今回はかりは死ぬかと思ったぜ、だってさーゾルルの奴俺にまで零次元やりかけたんだぜっ！」

「ハハッそして、文句を言ったら避けられないお前が悪い。とでも言われたか？」

「・・・そーなんだよ・・・で、隊長はどうかしたの？大将なら上だけど・・・その様子だと用事終わったほいよな・・・」

「まあな・・・あ、ロギギ。明後日ぐらいにでもこれをケロロに渡してくれないか？」

「へ・・・？手紙・・・？」

ギロロがロギギに渡したのは折りたたまれた手紙だった

「なんで・・・？自分で渡せばいいじゃん。一緒に住んでるんだしさ・・・」

「ちよつと・・・な」

「・・・。まあいいけどさ」

ロギギは手紙を受け取り仕舞う。

「あれ？もう隊長行くの？」

「ああ・・・じゃな」

「・・・。隊長。またな」

ロギギがそういうと、ギロロは何故か瞠目した。だが、一瞬で無表情に戻しその場を去る

「・・・。なんか変だったな隊長・・・俺もなんでまたなって言ったんだろ？いつでも会えるのに・・・」

ロギギは自分が無意識に言った言葉に疑問を持つが、気にせずケルルに報告するために執務室に向かった。

「うわっ・・・めつずらしいー大将とサラが寝てるなんて・・・まあここ最近、不眠続きだったし、隊長が言ったのか？だったら・・・起こさない方がいい、よな・・・？」

執務室ではソファでケルルのサラが寝ていた。

一時間すると、起きた。

「あ、大将、サラ。おはよう？気分」

「・・・」

「お兄様・・・もしかして・・・」

「おい、ロギギ」

「へっ？大将なんでそんなに怒ってんの？」

ケルルの低い声で若干驚きながら用件を聞く。

「ギロロは・・・どこ行っただ？」

「隊長？隊長なら一時間前ぐらいにもう、出て行っただけど？それがどうかした？」

「あいつ・・・一服盛りやがった・・・！ご丁寧にソファまで運んでくれて・・・！#」

ケルルは毛布を剥がすと、怒りながら、言う。

「盛る・・・？まさか・・・！隊長が大将に？そんなことして何の利益になるんだよ？」

「んなの俺が知ってえぐれえだっ！ロギギ、アイツからなんか、預かってねえか！？」

「（隊長・・・なんで、盛ったんだ・大将がすっごく怖い・・・）え・・・と、ケロロ宛の手紙一通デス・・・」

「手紙い？」

「ハイ。隊長から・・・」

「渡された時なんて？」

「明後日ぐらいにケロロに渡してくれって」

「んなの自分で渡せば・・・」

「俺もそう思っただけど・・・」

「けど？なんだ？」

「よくわかんねえけど・・・」

ロギギは言葉を詰まらせる。ロギギ自身もわからないのだ。『なんとなく』である。

「・・・日向家に向かうぞ、ゾルル以外の幹部を招集しろ」
「了解」

その三十分後、ケルル達は日向家に向かっていた。

冬樹たちはリビングでおしゃべりをしていた。ケロロ達は部屋に

行ったら寝ていたので気にしなかった。すると、ベランダが空いた
「冬樹！ケロロはどこだ！？」

「ケルル！？軍曹なら、部屋だけど・・・」

「サンキュ！」

ケルルが顔出したかと思うと、ケルル達は一斉にケロロの部屋に向かっていく。

「何・・・？いったい・・・？」

「そういえば、軍曹の部屋に伍長いなかったね・・・」

「そうね・・・どっかに行ってんじゃない？」

ボタンと、大きな音を立てたにも関わらず、ケロロ小隊（ギロロ除）は毛布にくるまってスヤスヤと寝ていた。

「・・・。おい！ケロロ！起きろ！寝てる場合じゃねえぞ！おいゴ
ラア！#テメエも一服盛られてるじゃねえかー！##」

「お兄様・・・とりあえず、落ち着いて；」

余程ギロロに盛られたのが悔しいのかケロロの完璧八つ当たりである。

「おーい・・・頼むから起きろ！大将がマジで怖いの！マジで！」

「で、あれ・・・どうしたんですかあゝ？」

「ああ・・・隊長に一服盛られたんだ・・・気づかなかったからさ・・・
大将の怒りが凄まじい訳・・・怖い・・・」

タナナたちは何も聞かされずに連れてこられたのでケルルのお怒り理由を知らなかったのだ、ロギギが語っているとき涙眼である。

「ちっそっちは！？」

「全然起きる気配なしですよあゝ」

「すっげー幸せそうな顔（笑）キキキッ」

「ちっ」

ケルルは再度舌打ちをすると、バズー力を転送した。

「え？大将！？；」

その行動をみてロギギたちは外に出る。長い付き合いだからこそ

ケルルが何をするかは一目瞭然だった。

次の瞬間、ケロロの部屋からドカンと音がし、火薬の匂いが充満した。

「おーい・・生きてるかー? ;」

「な・・なんでありますか・・いたい」

「さっさと起きろ! ほら、起床!」

ケロロの抗議も最早無視して、ケルルは四人を起こす。手加減したのかケロロ達はアフロにはなっていない。

「いったい、なんでありますか!? まったく、いきなりバズーカで起こされるとは思っていなかったでありますよ ;」

「・・あれ? 軍曹さあん・・僕達リビングに居ませんでしたか?」

「いきなり団子を食べて・・」

「ギロロくんから出されたお茶を飲んだら眠たくなって・・」

「デメエらも盛られてんだよっ!」

『何い!? ;』

「とりあえず、大将もお前らも落ち着けよ、本気で ;」

怒りと混乱となっている状態でロギギが一言呟いた。

とりあえず、少し落ち着きを取り戻したケロロ達はケルルの話を聞いていた

「じゃギロロは我輩達に新しい睡眠薬を飲まして、ケルルのところに行つて、ケルルに一服を盛つて・・消えた?」

「だな。認めたくはねえがギロロは今回ばかりは自分の意思で消えたつてことだ。」

ケルルが言った言葉でケロロ達は肝が冷えた。以前ではケロン軍の呼び出しのせいだ。だが、ギロロが見つかった時には自分達には武器を向けていた。

「何を思つて・・ギロロが離れたかわからねえが気を引き締めた方がいいだろう」

ケルルが言い放った言葉がケロロの部屋で響いている頃・・

「本当に・・・これでケロロ達には手を出さないというんだな」

「勿論 僕がギーくんとの約束を違える訳ないでしょ？」

そこには、ギロロの目の前には帽子を目深く被って、目が見えないケロン人がいた。

「無論、ケロン星、ケロン軍、ペコポン、反ケロン軍も」

「だから、出さないって、兄さんは出す気はないって言ってるし、そんなことになったらギーくんは裏切っていいよ」

「裏切るつもりはないさ」

ケロン人の台詞にギロロが言い放つ。その言葉にケロン人は瞠目する。

「何言って・・・」

「昔約束したろ・・・何かあれば助けると。その約束が今なのであれば貴様との約束も守れるし、ケロロたちも護れる一石二鳥ではないか？」

「ギーくん・・・それおかしくない？・ボクはギーくんが護りたい人達のいわば敵であって、約束ではどうにもならないんだよ？いいの？」

「構わんさ」

「ボク、そういうギーくん好きだよ」

ケロン人が言い放った言葉は小さかったのかギロロには届いていなかった。

「ん？何か言ったか？」

「なんでもないよ。じゃ・・・ようこそ。ギーくん、ボク達の世界へ」

消えた紅（後書き）

あゝ緊張するよー

約束の記憶（前書き）

前回と同様私は題名に添った内容を行いますので、短かったり、異様に長かったりする場合があります。

約束の記憶

ギロロが消息を絶って翌日、ケロロの部屋で会議が行われていた。「しつかし・・・ギロロはなんでまた、そんな行為をしでかしたかです。あります・・・」

ケロロの言葉に一同沈黙ができたがケルルがふと口を開く。

「そういやぁ・・・あのいきなり団子どうしたんだ？」

「あ？あー・・・あれねえマジョジョって知ってる？ギロロの従妹のさ。そいつが来てお土産に貰ったらしいよ」

「マジョジョに？」

ケロロの言葉に反応したのはロギギだ。彼はガルルとギロロのクローンで二人の記憶を持っている。だが、所々しかないらしく、他四人とは違い、完全ではないらしい。

「あ、ロギギ、知ってる？」

「一応・・・両方の記憶にしているけど、あいつって体弱かったんじゃないのかなかった？」

ケロロの言葉で記憶を引きずり出しているのか、ロギギの眉間に皺ができる。

「あいつが来れるとは思わないけど・・・」

「兄君と来たって言うていたであります」

「・・・そのマジョジョが怪しくねえか？」

「奇遇でありますな、我輩もそう思っていたとこであります・・・偶然にしてはできすぎているでありますが・・・」

「だが、団子の方には何もされていなかったってことはお茶の方に睡眠薬を仕込まれたと見て間違いなさそうだなあ」

隊長格の考えにクルルが補足のように付け足す。

「しかし、拙者がきかない新薬でござるか、そのようなモノが作れる者・・・」

「で、でも、マジョジョが怪しいってだけでまだアイツが犯人って決まったわけじゃねえだろ？」

ケルルたちの意見でロギギが言う。その言葉聞いてケルルたちも、早計だと思った。

「まあごちゃごちゃ考えるのは後だ。とりあえず、ギロ口を探そう」
「突撃兵組、参謀組、んでロギギとドロ口と別れて探索であります。参謀組はここで通信を待っていてほしいであります」

『了解』

ケルルとケロ口の掛け声で解散したケロ口小隊とケルル小隊であった。

ロギギとドロ口は奥東京市の南にいた。

「隊長・・いねえな・・もしかしたら、もうこの町にはいないかもなあ・・」

「不吉なことを申されるな・・と言いたいでござるが・・これだけ探してもギロ口くんの影も形もないからね・・」

「タナナたちからも連絡ねえしな・しっかし、マジョジョ、ねえ・・」

「どうなされた？」

突然、マジョジョのことを言い出したロギギにドロ口は質問する。彼がこの探索をしてから明らかに何かを悩んでいた様子だったのだが、悩むというより思い出すといった方が的確な表情をしているロギギをドロ口は邪魔をしなかった。

「さつきからさ・・何か・・重要なことを忘れているようなそんな感じがするんだよなあ・・・なんだろう?」

「重要なこと？」

「おう。なーんか、忘れてる気がするし、忘れちゃいけないって・・そんな感じがするし・・訳わかんねえ」

「ずっと、お主が悩んでいたのはそれが原因でござるか・・」

「まあな」

何かを忘れているというロギギに対し、ドロロはギロロかガルの記憶だと踏んでいる。ケルルに聞いた話だが、前述したとおりロギギは完全に記憶がないといわれているが記憶の容量が多すぎるために封印されている。だが、何かの拍子に思い出すこともあるそうだ

「まあ．．そのうち思い出すよ」

「かもな。こんなところでウジウジしたって何も始まらねえしな」

「そうそう」

二人が休憩を終え、探索に戻ろうとした時だった．．．

ズキンッ

「いつつ．．」

「ロギギ殿？大丈夫でござるか？」

急にロギギが頭を抑えたのだ。心配になり少し行きかけたドロロはロギギの元まで戻ってきた。

「大丈夫．．少し、頭痛がただけだからさ．．いつ．．！」

「ロギギ殿！？」

ズキンッ

「い．．ああア．．！頭．．！ワレ．．ル、イたい．．！」

「ロギギ殿！ロギギ殿！」

頭を抑えて、フライングボードの上で蹲るロギギ。ロギギはドロロの声が微かに聞こえた後誰かの声に導かれるように意識を失った。ドロロは意識を失ったロギギを抱え、日向家に戻った。

『ここどこだ？俺．．確か、気絶したんじゃないかっただけ？；すっげー頭痛して．．』

ロギギは気絶する前の記憶を辿っていた。今ロギギがいるのは灰色の世界だった。

『．．．どうしよ．．』

ロギギが思案に暮れていると．．

『マジヨー！』

『へっ』

すると、ロギギの脇を通りぬけた影がいた。

『なんで・・・小さい頃の隊長がここに？』

それは幼い頃のギロロだった。後ろを振り返れば病室が広がっていた。ロギギの記憶にも残っているマジョジョが入院していた病室だった。

『え？え？どうなってんの？これ・・・もしかして、大将達が視た、不思議夢か？』

ロギギは幼いギロロを追って病室に入っていた。

そこにはギロロとマジョジョがいた。

『ギーくん・・・もし、ボクが助けて、仲間になってって言ったらなってくれる？』

『当たり前だ！』

『じゃ、約束だね』

『おう！約束だ！』

ギロロとマジョジョは指切りをしていた。

『そうか・・・隊長はマジョジョと約束していたんだ・・・だから？違う。隊長はそんな理由でケロロたちを裏切ったりはしない、何か弱みを・・・？』

ロギギはぶつぶつと呟いている。ロギギは馬鹿そうに見えるがケルルがいない場合は臨時指揮官をやることもある。実質反ケロン軍の統帥ケルルの右腕としていたのだ。それなり頭は回る。

『隊長がなあ・・・』

ロギギが納得しなさそうに考えていると、遠くから声がした。

『なんだろ・・・？誰かに呼ばれている？』

ロギギはそんな感じがして、声がする方に向かった。

そこにはギロロに似た奴がたたずんでいた

『あゝあ・・・宿主もばつかなあ・・・ん？誰？お前、ここは宿主の場所だぜ？』

『へ？あ・・・悪い・・・なんか気づいたらここにいたんだ』

『ふうん・・・じゃ、帰れ』

彼はそついうとロギギをけり落とした。

『!?!えええ!?!』

ロギギは抵抗もできずに真っ逆様に落ちて行った。

約束の記憶（後書き）

ケル：はいはい、ここで業務連絡です

ロギ：前作・今作についての質問コーナーを設けたいと思いますっ

ギロ：なんでも聞いてくれ、すべて答えよう

ケロ：そのことありますっ！別に作品についてじゃなくてもいいでありますよ？

四人：それでは質問待ってますっ！

新たな登場人物（前書き）

二話連続投稿です

新たな登場人物

「あんの・・・馬鹿・・・」

「まあまあ、今のところはどうもないって、クルルも言っているんでありますし。」

ロギギが寝ている医務室ではケルルやケロロがいた。ドロロが気絶したロギギを連れて帰ってきたのは、十分前。連絡を聞いて、ケルルは戻ってきたのだ。

「しかし、なんで頭痛なんか急に・・・」

「もしかしたら、ギロロかガルルの記憶が蘇ったかだな。あいつのは容量がでかすぎだしな」

ケルルの言葉でケロロは納得する。

「ん・・・？」

そうしていると、ロギギが目を覚ました。

「ロギギ。大丈夫か？」

「大丈夫でありますかー？」

「・・・大将に・・・ケロロ・・・？あれ？ここどこ？」

最初はボンヤリしていたが、段々頭が覚醒していったのか、瞳に光が戻る。

「ここは医務室だ。お前頭いてえとか言って倒れたってドロロから聞いたぞ」

「あゝ・・・まったく、反論材料ないです。ドロロの言つとおり・・・すっぱー頭・・・痛くてさ・・・割れそうだったの」

「今は？」

「今はどうもない」

クルルの問いにあっさり答えるロギギ。気絶する前の頭痛が嘘のようになくなっていた。

「で、今回は何を思い出したんだ？」

「んゝ．．今回と直接関係があるかは知らないけど．．幼い隊長と、マジョジョが。マジョジョの病室で約束をしている、記憶。」

ロギギはひどく落ち着いた様子で語った。

「約束う？」

「ギロロとマジョジョが？なんの？」

「んゝ．．どういった経緯でそんな約束したかはわかんねえけどさ．．マジョジョが仲間になってって言ったら約束してくれるとかそんな感じ．．．」

「成る程な．．」

「それだけで我輩達に一々、一服盛ったんでありますか？」

ロギギの言葉でケルルとゲロロが呟く。だが、ケルルはロギギの表情に気づく

「まあ後でそれは考えるとして．．なんだ、ロギギ。やけに納得してねえ顔じゃねえか」

「へっ？そうか？」

「ああ。まだ、なんかあンのか？」

「いや．．あると言えば、その夢から抜け出す時に、隊長のそっくりさんに会ったことかな？」

そういった、ロギギだが、やはり納得していない顔していた。

「ゲロロ、ちょっと来い。クルル、後は頼んだぜ」

「ゲロ？」

「んゝ」

ケルルはゲロロの首っこを掴みロギギをクルルに任せて外に出た。

「どうしたんであります？」

「ロギギの奴、なんかまだ隠し事してやがるな．．」

「あ、やっぱり？」

「なんだ、わかっていたのかよ」

「だってゝロギギの納得していない顔、ギロロにさ超そっくりなんでありますよ」

「．．．．なるほどな」

「しっかし、何に納得できないの？」

「さあな。そこまでわかるか」

ケロロたちが上がったのは日向家リビング、そこには日向姉弟のどちらかが昼飯を調理中のはずだった。

ケロロ達がリビングのドアを開けると、知らない人間がいた。

「……誰？」

流星といったところか、息はぴったりだった。

「あ、軍曹とケルル。」

「あ、ボケガエルとケルルじゃない。」

日向姉弟が呆然している二人に気づき声をかける。

「夏美殿……つかぬことを聞きますが、あの御仁はいつたい誰……？」

ケロロが顔面蒼白になりながら言う。ケルルは呆れた表情になりながら、庭に視線を向け、あった物に密かに驚き、見知らぬ人間に視線を向ける。

ケルルの視線を受けた者はこちらに微笑み返した。

「ああ、ティオラくん？庭にあるやつで乗ってきてガス欠でここに落ちてきたのよ」

「それでお腹が空いていたからご馳走したらお礼に皿洗ってくれてるんだ」

二人が苦笑しながら言った。要訳すればこういうことだ。

ケロロ達がない間にガス欠でここに不時着したティオラとやらは腹を空かしていて夏美たちがご馳走したら、お礼に皿洗いをしてくれた。

「つで、いいのか？」

「うん。」

「だから、そう言っているじゃないの」

「ゲロ……」

ケルルの要訳でソファで集合しているのはそこにいたメンバーだ。
「で、ティオラ殿はなんで、また、あれで旅を？」

「旅って決まってるわけじゃ・・・」

「いえ、旅をしています。兄弟を探しているんです」

ケロロの言葉で冬樹が言おうとすると、ティオラはケロロの言葉を肯定した。

「兄弟？ティオラくん、兄弟なんて、居るの？」

「はい。兄が一人います。でも、僕が彼のところに行くたびに彼はいなくなります・・・」

「それって、嫌われてんの？」

「ケルル！」

ティオラの言葉にケルルが発言する。夏美はケルルを咎めるように名を呼ぶ

「い、いえ！夏美さん、おそらく合ってます。以前彼にはつきり言われました・・・もう、近くに来んな。テメエが来ると俺の居場所がなくなる」って言われました・・・」

「何よ・・・それ、酷い・・・」

夏美の呟きにティオラは苦笑でしか返せなかった。

とある訓練施設。そこで周りに獣に囲まれた長髪の少年がいた。少年の腕は変で大きく突起物を有していた。少年はそれを操り、周りに居る獣を切り裂いていった。

『合格だ、バイル。君を組織の一員として認めよう』

「・・・ども・・・」

謎の声に感情もなく呟いて、少年　バイルは去る。

忠誠と大元帥の利用（前書き）

大元帥・・・ごめんよ・・・

忠誠と大元帥の利用

「で、ここが食堂!」

「広いなここは・・・なあ、マジヨジョ。今運ばれているのは?」

マジヨジョがギロロの言葉でそちに視線を向けると、ボロボロで顔右がほぼ火傷の傷跡を残し、両腕に鎖を巻いているケロン人が運ばれていた。

「ああ・・・レイド人のハギくん?」

「レイド人?あの?」

「うん。」

レイド人とは、昔ケロン星にいた忠誠心が驚異的に持っているケロン人がいた。そのケロン人の一族は他の空き星に移住しレイド人として独自の文化が誕生した。レイド人は忠誠を誓った相手を主とし、その主のためにならんでもする。忠実な奴隷ということだ。

「ハギくんね、一応この組織には属しているんだけど、主がまだいないから単独行為が多くて、人間関係も悪くはないけど上司とトラブルになることが多いんだよねえ」

「知り合いなのか?」

「まあね。悪友っていうのかな?犬猿?性格があわないからよく喧嘩する」

「・・・。後で話してみるか・・・」

「どうぞ」

とりあえず、昼ごはんを食べるために食堂に向かった。

マジヨジョが呼び出され、一人なったギロロはハギギの下に向かっていた。彼と話をするためにだ。

探していると、案外早く見つかったが、手当てされていない状態で発見された。

「おいっ!大丈夫か!?」

ギロ口は急いで駆け寄るがかすかに息をしているだけのハギギを見て、肝が冷えずぐに医務室に向かった。それで不幸なのが医者がある際、度不在だったということだ。

「ちっ・・・！普通は誰かが交代にいるべきだろうが！#」

ギロ口は怒りを露わにしながらハギギをベットに寝かせ、手当てを始める。

手当てを終わり、一息をつき、目覚めるまでいようと判断したギロ口は銃を転送させ、整備し始めた。

「ん・・・？・・・誰・・・？」

しばらくしたらすぐに起きてきた。はつきりギロ口に視線を向けている。

「おお、気が付いたか。俺の名はギロ口。貴様は？」

「・・・ハギギ。なんで、俺医務室に？」

「傷だらけでソファに倒れていたお前を俺が見つけてつれてきた。

これでいいか？」

「・・・。」

簡潔でわかりやすい説明だった。

「？大丈夫か？痛いところはないか？」

「あ、ああ。ない・・・俺がレイド人だって、知っていてやったことか？」

「？何が？」

「この組織であまり俺を助けると他からも嫌われるぜ？」

「・・・それがどうした？貴様は貴様だろう。俺が関わろうと他の連中には関係ない」

ギロ口はきつぱりとした表情で断言した。

「それに俺が仲良くしたいと思ったのだ、それでは理由にならんか？」

ギロ口は本当のことを述べた。そうだ、元々自分はここの人間ではない。だが、仲良くしたい気持ちはある。

「・・・。」

「ん？ハギギ・・・？」

黙りこんだハギギを不思議に思ったギロロだが、次の瞬間驚くことになる。ハギギが跪いた。

「ハギギ！？」

「あなたに・・・私のすべてを差し上げてもいいでしょうか？」

レイド人は忠誠に自分の命を差し出す。そういう意味でもこの言葉が使われる。

「・・・俺、なんかでいいのか？」

「あなただから。俺は選ぶ」

ハギギは片目だが、ハッキリとした意思を持っていた。

「いいんじゃない？ギーくん」

「マジョジョ・・・」

「・・・。」

医務室のドア影から出てきたのはマジョジョ、ハギギは声がした方に視線を向けるがすぐに逸らしてしまう。

「し、しかし・・・俺はハギギが思うような人間ではないし・・・」

「ギーくんまだ言う？；ハギくんはギーくんの人柄を見抜いてこそその行動なの。それを無碍にするの？」

「う・・・；」

「別に俺はどつちでもマスターのやりたいように」

マジョジョやハギギの言葉で五分ぐらい時間が経つと、ギロロは一息吸い込む。

「わかった。ハギギ・・・俺に着いてきてくれるか？」

「勿論。そのための俺の命」

「だが、命は掛けるな」

「はい？」

ギロロの言葉で素っ頓狂な声をあげる。同じ心境なのか瞠目しているマジョジョ

「何事にも生きて帰ってこい。任務でも無茶はするな。いいか？」

「・・・。はい」

「後、敬語もなしだ。タメ語で構わない」

「あら？上下関係が厳しいギーくんが珍しいね」

「ケロロはともかく、俺にはないから」

「・・・。そう（いつそ、見事といえる）」

ハッキリと告げたギロロに呆れた視線を送るがギロロは気づいていない。ハギギも苦笑いだった。

「いいな？ハギギ」

「あ、ああ（やっぱ、変わってるな・・・）」

さらりと失礼なことを思いながら、ギロロと行動を共にすることになったハギギだった。

ティオラ、そしてハギギが忠誠を誓った日の夜。ティオラは兄弟が見つかるまで日向家にいることになった。ケロロたちも異論はなく、ギロロ探しに精を出していたが見つかるはずもなく、意気消沈した感じで集合した。

「で、これからどうするかが問題であります。ギロロは奥東京市にいないことはもはや、明白でありますし・・・」

「で、ロギギ。起き上がって平気か？」

「ん？大丈夫だって、頭痛はあん時だけだったし、今はどうもねえって」

「ならよし」

ロギギ自身不思議なぐらい昼とは違い元気なのを不可解に思っているが考えてもどうしようもないので気にしなかった。

「約束・・・ですか・・・それがやっぱり、原因なんですかねえ」

タナナと隣同士で座っているタママがふと呟いた。ロギギが見た夢はここにいる全員に伝えられている。

「そうとも限らないですよー隊長がそんなことでケロロ小隊を裏切るとは思いませんしねえ」

「タナナの言うとおりでありますなー・・・」

タママの言葉でタナナが言い、その言葉にケロロが同意する。

「まあ・・・で？ロギギ。テメエはさつきから何を悩んでる？」

「へ？バレバレ？」

「当たり前だ。阿呆」

「ヒデエ；」

ケロロはその漫才を見て

「（あそこだけ平和・・・）」

と思っていた。

「んー・・・なんていうかさ・・・『約束』のあれを思い出してさ・・・不思議に思ったことがあるんだけどさ・・・それがどうしても思い出せないんだ。なんか、直感的には約束は果たせれないって言ってる気がする・・・」

「なんだそれ」

「俺もわからないから思い出そうとしているんだけどさー・・・まったく、記憶にねえの」

ロギギは苦笑するがそんな場合でもない。

「ケロロさーん、すみません・・・お茶と夜食を持ってきましたよー」

そんな中、ティオラが人数分の夜食を持ってきた。

「おお、ティオラ殿。感謝であります！」

「サンキュ」

それぞれが礼を言っただけで夜食を食べる。そんな風景をにこやかに見ていたが、突然「あ」と言った

「んあ？どうした？」

「いえ、ガルルって言いましたっけ？先ほど電話があつて明日地球に来られると言っていました」

とニコやかに爆弾発言をしたティオラだった。勿論、ケロロ達は慌てた。ギロロに恋愛感情を持っているのはケロロとクルルにドロ口だ。ガルルは自他も認める重度のブラコンであり、その重度は時折垣間見る。そんな彼が今ここにギロロがいないとわかると暴走するに決まっている。前回の事件以降、ブラコン度は輪に掛けて酷くなったのだ。

「どうしよー！ってケルル、どこに連絡してんのさっ！」

「大元帥」

慌てるケロロに冷静に返すケルル。

「大元帥に？大将、連絡してもしょうがなくな〜？」

「アホ拔かせ。大元帥に頼んで、ガルルが来るのを阻止してもらうんだよ。大元帥の命令なら、ガルルも下手に来れねえだろ」

ニヤリと効果音が着きそうな感じでケルルは言い放つ。その言葉に成る程と反ケロン軍とは対象にケロロ小隊はいいのかと思ってしまう。が緊急事態なので黙っておく。

「あ、でもゾルル兵長だけはこちらに欲しいでありますなあ・・・」

「おう。それ俺も思った・・・あ、大元帥？ケルルだ。とりあえず、ガルル小隊をこっちに寄越すな。任務でもなんでもいいから阻止しろ。ああ、でもゾルルはこっちに寄越せいいな？よし」

一気に用件だけを告げるとケルルは通信を切る。

「一方的でありますな・・・」

「まあな。話を長引かせてギロロ不在という事実が知られたくねえしさ」

「それについては同意見であります」

「（なんでだろう・・・大将とケロロが黒いんだけど・・・）なんでだろう・・・」

「何がです？」

「なんでもない；でもさあーガルルの協力はあるとは思っただけど・俺の記憶だけじゃ限界あるし、マジョジョの兄貴ともアイツは接点あるから探ることもできるし」

「それはもうちょっと先であります。マジョジョが、ギロロをそう仕組んだかはまだ、ハッキリしていない訳だし、犯人にするのはまだ早いであります・・・」

ロギギの提案も考えていない訳ではない。だが、それを実行するためには証拠があるし、ケロン軍を誤魔化すための材料もないのだ。そんな時期にペコポンにこれば知っている大元帥以外の上層部が怪

しむ。

「流石軍曹さんですう！」

「大将も流石ですねえ」

突撃兵組がケロ口達を褒めているがロギギはある点に気づく。

「なあ大将・・・」

「あ？」

「大元帥に連絡は取れるんだよね？；さっきみたいにさ」

「ああ」

「だったら、ガルル小隊をこっちに寄越すときに大元帥に連絡して大元帥の命令でペコポンに向かうってことにしてしまえば、他の上層連中は黙るんじゃないか？；」

ロギギの提案は一気にその場の空気を凍らせた。

「「それだっ！」」

「頼むから早く帰ってきてくれ、隊長！」

ロギギが涙目になりながらツッコミを入れる。

不思議夢

その頃のギロ口

「ギロつくしゅん！」

「マスター？」

「ギーくん、風邪？」

「いや・・・くしゃみと同時にロギギに呼ばれた感じがしたが・・・
気のせいかな・・・」

気のせいじゃないよ！気づけ！

「誰だ？ロギギって」

「ギーくんの反ケロン軍での部下」

「違うからなっ」

「え？違った？」

部下だったのは記憶がない時で、元々はケルルの部下なので訂正しておく律儀なギロ口だった。

三人は夕食を食べに食堂に向かっていた。深夜十二時、普段なら寝ている時間だが訓練や色々で食事ができていなかったのだ。食堂についた三人は他に誰がいることに気づいた

「あれ？あの子・・・今日、試験で一発合格した・・・バイルって言ったけ？」

「あの試験をなー・・・」

「ハギギは？」

「勿論一発合格」

ギロ口の問いに即答するハギギ。ちなみに試験とは魔獣を幻覚で作り出し、それを時間制限の中すべて、倒せたら合格である。だが、レベルが高く、そう簡単には合格にはならないのが現状だ。

「何してるんだろっ・・・部屋は与えられてるはずなんだけどなあー
ボクたちみたいに夕食食べ損ねたとか？」

マジョジョの言葉で苦笑しかなかった残りの二人だった。

ギロロがバイルの近くに行つて、表情を伺うと

「・・・。ハギギ・マジョジョ、夕飯食べるぞ。静にな」

「?どうしたんだ?」

「何々?」

ギロロは二人の下に戻り、二人とバイルと一番離れた席に座り、注文をする。

「寝てた・・・」

「あの体制でか?」

「ああ;爆睡だったな;」

ちなみにハギギの言つたあの体制とは椅子に座つた状態で猫背になつており、首を下に向けて、寝ている。器用だと三人は思った。

「どうする?起こすか?」

「いや、後で運ぼう。マジョジョ」

「はいはい、擬人化魔法ね。食べ終わつたらね」

言葉通り、ギロロたちは食事を終わらせ、擬人化魔術によりギロロを人型にし、ギロロはバイルをそろつと運んだ。

「ここか・・・なんで、部屋で寝ないんだろうか?」

不思議に思つたがそれもしょうがないので布団をかけ、戻ろうとしたが・・・

「・・・居場所・・・奪わないで・・・」

半目で意思がモヤモヤとしているが、はつきりと涙を流しながら言い放つ

「・・・大丈夫だ・・・誰も奪わない」

「・・・誰だ・・・?俺・・・食堂で寝てたはず・・・」

覚醒したのか色々混乱している様子だった

「食堂で寝ていたのを俺が運んだ。あのままでは風邪引きそうだったからな」

「・・・そか・・・ありがと・・・」

「ああ。俺の名はギロロだ。貴様は?」

「バイル」

「バイル、か。これからよろしく」

バイルから返事はなかったが、ギロロはそのまま出て行く。

ギロロが行方不明になり、二日後。搜索は難航していた。ゾルルも合流し、それぞれ話し合っていたがやはり、ガルル小隊が必要だと考え、大元帥に頼み任務としてペコポンに来れるようにした。その夜

「それでは、ケロロ小隊とケルル統帥とアンゴル」サラに一服盛り、行方を暗ました、と？」

「だから、さつきから言ってたろうがっ！何回説明すれば気が済むんだっ！#」

ガルル小隊が合流して一時間。ガルルがその現実を受け入れたくないあまりに説明だけに一時間費やしたのだ。

「認めたくなえのはわかるが、現実を見る。理解しろ。今度んな真似したらテメエは容赦なくナイトボールの餌食な・・・」

ケルルはかなり怒り狂いながらいう

「ガルル！頼むから、これ以上大将を怒らすような真似はすんな！

頼むからああ！！」

「必死ツスね・・・ロギギさん；」

「目が、本気って語ってるわね・・・」

「どうしたの？アレ」

「八つ当たり・・・が・・・ロギギに・・・」

ゾルルの言葉にあくとガルル小隊が視線を遠くやる。

司令室に、布団を引いていく。

「なんか・・・修学旅行を思い出すでありますな；」

「あはは；こうした方が楽しいですし；」

ケロロの言葉で乾いたタママの言葉が響く。

起きても寝ても、話題は今回のことばかりでふいにケロロが呟いた
「は？なんだった？テメエ」

その眩きは隣にいた。ケルルにだけ聞こえていた。

「だから・・・我輩達のこと嫌いになったのかなー？って思ったんです
あります・・・」

「どうしたんだよ？隊長らしくねえ意見じゃねえかあ？」

ケロロの言葉にクルルとその隣に寝転がっていたルククも賛同するが如く頷いている。

「一向に侵略が進まないこの部隊。普通なら脱退届けをいつ出されてもギロロの性格上ありえる事態もあるけど、ありえない光景があるであります・・・；」

『あゝ・・・まあ・・・』

「でしょ？」

ケロロの言葉でケロロ小隊とケルル達は同意の意を示す。堅物ギロロは真面目だ。だから、こういう事態には我慢ならないこともあるが、時折自分もその原因となっていることに自覚することもある。

だが、それを否定する人物が居た

「それ、違うんじゃない？」

ロギギである。一同の視線がロギギに集まる。

「だって、隊長がそんな性格ならとくに脱退届けを出してるってそれにもしそうなら、盛らずに態々裏切り者のレッテルを貼られるような行為をせずに異動届を出してるって」

ロギギの言葉でそれもそうだと思い、明日さらに会議をして、探そうということに

「・・・あれ？；俺、寝てたはず・・・？」

ロギギがいるのは廃墟や瓦礫が沢山ある場所だった。

「あれれ？；何で、なんとこにいるんだ？俺は司令室でみんなと寝てたはず・・・；」

ロギギはとりあえず、歩くことにした。だが、歩いてどこを見ても終戦後のようにボロボロで建築物にいたっては見る影もない。

「なんで、こんなにボロボロな訳？まさか、過去の記憶でも見てん

の？それなら、隊長の方がいいなあでも、ガルルっぽいな……この様子だとさ。」

自問自答をしていると、声がした。ロギギは声がする方に向かう。そこにはギロロがいた。

「……隊長……？たい」

ロギギはギロロを呼ぼうとしたが、ギロロが何かを言っていることに気づいた。耳をすませると

「俺が……あやつらを護らないと、ダメだ。俺でいいのなら、何をしても構わない。だから、ケロロ達には手を出すな……！」

「え……？！」

「頼むから……ケロロ達には……ケロロ小隊、ガルル小隊、日向家・ケロン星にケロン軍、ペコポン……反ケロン軍……俺の命はどうなつてもいいから、手を……出すな……！」

「隊長……？何言つて……？これ夢？それとも隊長の不思議夢か？」

ギロロは手に持っていたナイフを首に当て、しばらくすると、それに気づいたロギギが慌てる。

「隊長……！それはまずいって！隊長！」

ロギギの叫びは聞こえないのか、ロギギが手を伸ばした瞬間ギロロはナイフを引いた。

「隊長……！！」

寝静まった司令室にロギギの叫びが響いた。勿論隣で寝ていたケルルがすぐに起きる

「るっせえぞ……ロギ」

不機嫌に呟くがロギギから返事がない。様子がおかしいと思い、ロギギを見ると、大量の汗をかきながら息苦しそうにしていた

「ロギギ！？おい、大丈夫か！」

ケルルの声で他の全員が覚醒する。

その後、すぐに医務室に運ばれプルルが診た

「軽い呼吸困難だけど、今は落ち着いてるわ、悪夢でも見たのかしら・・・？」

「あいつが起きた時、隊長って言うていたからギロ口関連の夢なんだろうな」

プルルの最後の言葉でケルルが自らの予測をたてる。今は落ち着いた表情で眠っているロギギ。何を見たのか、それはまだ聞けないのだ。

「あ、兄貴」

「だから・・・違うと言っているだろう！」

バイルとギロ口が廊下で会った。部屋に送り届け、一緒に行動していると、いつの間にかギロ口のことを兄貴と呼び出した。ギロ口は否定しているのだがそろそろ、否定するのも面倒なのではないかってきた。

「そろそろ、寝ろよ？もう、遅いからな」

「もう、寝るって。じゃお休み兄貴」

「ああ。おやすみ」

ギロ口が注意すればバイルはあっさりと寝に行った。ギロ口はあの男に呼ばれているためそこに向かった。

不思議夢（後書き）

小説書くのって・・・すごい疲れるんですね・・・4/24からこれを書いて・・・今が3ヶ月12日ぐらい？ですかね？・・・それでは、また明日！

黒猫（前書き）

今回は短いですっすみませんっ……

黒猫

「ん・・・？たいしょー？」

「起きたか・・・しつかりしろ。呂律回ってねえぞ。」

ロギギが呼吸困難を起こし、ケルルが診ていること二時間で目を覚ました。

「で、気分はどうだ？」

「ん・・・頭が少し痛いぐらいで大したことじゃないし・・・あ、治った」

「酸欠だろうな。まだ、寝ろ。夜中の二時だぜ？今。朝になったら事情聴取してやる」

「えー・・・されるの？俺；っていうか俺、今回の事件で関連でこの不思議夢見る確率高いんだけどー。」

「不思議夢・・・か・・・」

「そー」

不思議夢。前述からあったが、反ケロン軍襲撃事件の際ケロロとケルルが破壊プログラムの存在を知ったのもその不思議夢のお陰だった。滅多に見ないモノで全員その夢を不思議夢と呼んでいた

「捻りもなんもねえよな。名前」

「んー・・・まあこういう事件で関わってるみたいだしさ・・・見ないにこしたことねえんじゃない？」

ロギギは苦笑いしながら言う。それもそうだと断言するケルルだった。

翌日、ロギギはケロロたちに心配されながら起床した。朝食を食べ終わり、夢のことを話す

「ギロロ・・・が・・・？我輩たちのために？」

今一現実がつかめず呆然とするケロロ達。

「でも、それが本当だとは限らない・・・所詮は夢だからさ・・・」
だが、いやに真実味があった。そんなことは思いたくはない。だって、思ってしまったら最後のようない気がするのだから。

その後、ケロロたちは何かを探しているようできよろきよろしながら辺りを見渡していた。ケロロたち曰く黒猫に会いに行くらしい。

「ノラーノラー」

「あ・・・？ケロロ？」

猫系統の宇宙人との混血だろうか長い尻尾をぶら下げ煙草を吸いながら、木の上にいた。ケロロたちより若くクルルと同じ年ぐらいに見える。

「ギロロが・・・」

「知ってるって・・・会いに着たぜ・・・あいつ」

「なんか・・・言ってたでありますか？」

「べつつにー何も。」

「そうでありますか・・・邪魔したであります・・・」

ケロロたちが帰ろうとした。だが、ノラが突然、あ、と声を出した

「あ？どうした？」

「・・・ギロロがな・・・ここから帰る時、俺にお前は死ぬなよつつて帰って行った。ケロロ、おめえならこの意味わかるよな？」

「・・・ありがとうでありますっ」

「おい、ケロロ、どういうことだ？」

「ノラは極度の死にたがりであります。理由は知らないであります。が、死にたがっていることはわかってる、だから、煙草を吸っているであります。ギロロは会うたびに生きろって言うんであります。死ぬなどは一度も言わなかった・・・」

「ギロロがノラに伝えたかったことがあったってことか・・・」

「・・・なあ・・・ギロロ。気づいてるか？テメエの目・・・死に行

くような目えしてたんだぜ・・・」
煙草を吸いながら黒猫は呟いた・・・

悲しい日常とキルミラン

ケロロ達がロギギから話を聞いてる、同時刻ギロロは夢から目を覚ましていた。

「マスター、おはよ」

「・・・ああ」

「どうしたの？」

「いや・・・夢の中でロギギに呼ばれた気がただけだ。気にするな」
ギロロの周りにはハギギとマジョジョがいた。

「つか・・・なんで、マジョがいんだよ?」

「いいじゃん 別に。ハギくんには関係ないでしょー」

「マジョジョ：男の部屋に易々と入るな」

ギロロが窘めるも聞いておらず、むしろ反論もした
「だって、ギーくんたちも気づかなかったし、気持ちよさそうに寝てたからさー」

親切でしょ?と付け加える

「どこが親切だ#どこぞのびつくり企画だよ!#」

正確なハギギのツッコミが朝から入ったことは言うまでもなかった。

ギロロはケロロ小隊から離れて、やはり、彼らを護るためとは言え。悲しくもあつた、今でもその気持ちは変わらないし戻りたいと思う。けど、ここでも仲間ができてしまった。後戻りはできない。それに自分はケロロたちから見れば裏切り者だ。仲間に睡眠薬を飲ませた。それでも護りたかったケロロ小隊や日向家が住んでいる地球を

「ギーくん?どうしたの?元気ないよ?」

「いや、大丈夫だ」

「・・・そっか。朝飯食べよー途中でバイくん拾ってさー」

マジョジョはそういうと先に行ってしまった。ギロ口たちも苦笑しながら続いていく。あわよくばこんな日常が悲しくも毎日続くことを祈って。

ケロ口小隊は以前冬樹とケロ口が誤って復活させてしまった、キルミランシステムの監視の任務も一応ある。そのせいか地球侵略が多少お咎めが減ってきたのだ。

「もー！こんな時に報告書を作らないといけないなんてー！」

ケロ口は喚きながら、祠までケロ口小隊と共に歩を進めていた。

「しょうがねえって。それに封印を解いたのは隊長だろう？」

「うつ・・・」

クルルの横槍により何も言えなくなったケロ口であった。

ギロ口捜索に関してはケルル小隊に本日は一任してもらうことになった。

「あ、あれですねー！いつつ見てもボロツちですう」

「祠を馬鹿にしたら罰が当たるでござるよ」

タママが言った言葉をドロ口が嗜めた。まあいい例があるのでタママはそれ以上何も言わなかった。

ケロ口小隊一行が祠の付近に到着した。その時だった。ケロン人と人間が出てきたのだ

「ゲロオ！？」

「・・・！？ちっ！」

「隊長殿！あのケロン人の手元を！」

奇声を上げたケロ口とケロン人が目が合い、ケロン人は舌打ちしながら反対側にある屋根に上った。ドロ口に言われてケロン人の手元を見ると・・・

「あつちよつとー！それ、返すでありますよ！」

そう、ケロン人の手元にはキルミランが封印されている壺があった。あれを取られるわけにはいかない。

「それをこつちに渡すであります！」

「断る！バイル、行くぞ！」

「あ？殺さねえのか？見られたぞ」

「あの人の護りたい連中だ。傷つけるわけにはいかない」

「兄貴の？・・・ちっわかった」

ケロロたちは二人の会話はわからなかったがそれは後で聞くことにした。

「それは返してもらうでござるよ！」

「返せ、ですう！」

「ハギ兄・・・襲ってきたぜ？この場合は？」

「逃げるに決まってるだろ！」

ドロロとタママが二人に掛かる。バイルという人間はハギ兄と呼ばれたケロン人に問い即答された。

「だが、アサシントップはキツイ・・・バイル、追いつくならいいだろう」

「ん」

バイルは短く答えてから、腕を静かに上げた。その瞬間、バイルの腕が音を立てて、巨大な銃へと変形した。

「！？」

それを見たケロロ小隊は驚く。バイルはその変形した腕をドロロ達の下にやり、発射した。

ドカン！

そんな音を立てて、煙が当たり一面に立ち込めた。

「ゲホッゲホッ・・・なんも・・・見えないであります・・・！ゲホッ」

ケロロが咳き込んでいる間にハギギたちは去ろうとした。

「待つて。バイルくん」

「・・・テメエ・・・」

目の前にはティオラがいた。手には買い物袋がぶら下がっていた。

「ティオラ・・・殿・・・」

ケロロが呟いた。バイルが瞠目している。

「バイル。知り合いか？」

「・・・まあな。なんで、テメエがここにいんだ・・・あ？」

ハギギの問いに曖昧に答えてバイルはティオラを憎んだ敵のように睨み付ける。

「どうして・・・？テメエがいるんだ！？ティオラ！」

悲しい日常とキルミラン（後書き）

ドロドロの兄弟！だったりするっ

兄弟（前書き）

今回はバイルとティオラのお話ですっ！

兄弟

「バイルくん。ケロロさんたちの仕事の邪魔しちゃダメだよ。それが何なのか知らないけど・・取っちゃダメだよ」

「あ？んなの知るか。テメエの指図なんか受けねえよ。ハギ兄、行こうぜ」

「・・だな」

バイルはティオラの言葉に耳を貸さずにハギギを誘ってその場から去って行った。

「バイルくん！」

ティオラの叫びは無常にもそこに響いていただけだった。

バイルとハギギの襲撃された後ケロロ小隊は日向家に戻っていた。「キルミランを奪ってどうするつもりだ？」

「さあ？それは知らないであります。でも、きっといい意味ではないであります」

ケルルたちに説明をし、彼らの目的を考えていく。ティオラは無言だった

「さて・・ティオラ殿、あの黒髪のバイルという少年とは知り合いでありますか？」

ケロロがティオラの方に向き聞いた。ティオラは声を掛けられた瞬間、震えて、目を泳がせたがそれもすぐに終わり、ケロロたちの方へ視線を投じた。

「はい・・ボクが探している・・兄弟です。名はバイル。僕より二年早く生まれました」

ティオラはそこから自分の過去を話し始めた

「僕は人造人間と呼ばれるモノで・・ボクもバイルくんと同様腕が変形します・・ボク達の製作者は戦争に役立てようと思いボクたちを作り出しました。ですがバイルくんが完成し、いざという時にはもう、戦争は終わっていました。博士は悲しみました。バイルく

んはそれを理解し博士の傍にできるようになりました。博士は今度は人が幸せになるようなモノを製作しようと考えバイルくんを生み出してから、ボクを生み出しました。ですが、一年経ったある日博士はバイルくんを追い出しました。理由は知りません・・ボクはバイルくんと離れたくなかった。たった一人の兄弟だから、探して見つけて一緒にそこにいました。でも、バイルくんはすぐに消えました。そして、ボクは探しました・・でも、すぐ消える。その繰り返し。ある日バイルくんは『もう、近くに來んな。テメエが來ると俺の居場所がなくなる』と言いました。それが日本に來る前の話です。すみません・・長く話しちゃって」

ティオラは一気に話した後謝罪した

「いやいや・・結構な経歴で・・」

「人造人間ね・・・；そら唯一の家族だな」

「敵側になつていたら辛いですう・・」

「心が痛む話でござるな・・」

「兄弟対決かあ・・」

話を一気に聞いたケロロたちは思い思いの感想を言っていた。

ケロロたちは納得した、だから、あんな憎の目でティオラを見ていたのか、それはまた居場所を奪われるかも知れないという恐怖と不安とそんなことを無意識にやっているティオラに憎しみを抱いているのだ。

キルミランを奪い、戻ってきたバイルはすぐに自分の部屋に行った。部屋に入って鍵を即座に閉め、座り込む。

「（なんで・・・！なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで・・あいつがいんだよ！？あいつは置いてきたはずだ、また俺を追いかけてきたのか・・・！くそ・・また、俺の居場所を奪うのか！？あいつはいつもそうだった。博士も、全員そうだティオラが入ってくると、俺は要らない者にされる。先に生まれたのは俺なのに・・・！）くっそが、な

んでいる・・・！？・・・兄貴も俺を、捨てるのかな・・・？」

言い知れない不安がバイルの中に広がった瞬間だった。

その頃ハギギはとある男の下へ向かっていた。

「おい、もって来たぞ。キルミラン」

「そうか・・・すまないね」

「本当にテメエに協力すれば、マスターは解放するんだろうな？」

「勿論。ボクは約束を守る方だよ」

その答えに眉間に皺が寄ったハギギだが、踵を返しその部屋から誰かとすれ違いに出て行った。

「おい・・・あまり、苛めてやるなよ？つつか、テメエは一体何をしてんだ？」

「フフ・・・こればかりは副官の君にも教えられないよ・・・僕は完璧に蘇らせたいんだ、あんな不完全ではなくね・・・」

「・・・まだ、諦めいなかったのか・・・」

「当然じゃないか！でも・・・！もうすぐだ、もうすぐで不完全なあの子じゃなくなる！」

「・・・（哀れな）」

ゴーグルをして、白衣を着ているケロン人は目の前の男を冷めた目で見ていた。自分は彼の副官。何も言うことはない。

加速する物語（前書き）

更新ですww

加速する物語

ケロロたちはギロロ搜索と同時にキルミランシステムの行方を追っていた。だが、情報が少なすぎる、それに

「今回・・繋がってる気がするなあ・・」

「へ？今回って・・ギロロの行方不明とキルミランの？」

ケロロがガンブラを作っている中、背中をケロロに預けていたケルルが無線を自分の掌で遊びながら言った。

「そ。その二つ。ギロロは行方不明になって四日目。ギロロは間違はなく、どっかの組織に属している。」

「その根拠は？」

「あいつが姿を消して、目撃者が一人もいねえっていうのは異常だ。あいつがどっかに属して、その組織がギロロを隠したって言うのが今のところ、俺の見解だが・・どうだ？」

「確かに納得できると言えばそうでありますなあ・・でも、ケルル。そうになると矛盾が出てくるよ？」

「あ？」

「まず、もしどっかの組織に属すにしても我輩たちに睡眠薬を盛る必要は？」

「ねえな。ギロロなら脱退届けを出すはずだな」

「だよーそれが矛盾ー。二つ目はただの感なんでありますが・・ロギギが見た、不思議夢の件。もしそれが本当なら何か色々ス黒いモノが裏に渦巻いているような・・」

「そして、もう一つ。テメエの聞いた話によると、ハギギとか言うケロン人・・いや、レイド人だな」

「レイド人？確か主人を誰か一人に定めて、その主人のためならなんでもする？あの？」

「ああ。あの方が護りたい連中・・あの方ってギロロのことなんじゃねえのか？」

「確証は？」

「そんなことをする人物なんて一人しか思い浮かばないからだ」
「なるほどね。」

ケロロはその言葉で納得できた。

「でも、納得はできるし、それでしつくりくるし・・・」

「ああ？なんだ？まだ、なんかあンのか？」

「ないでありますよ・・・じゃあさ、なんでキルミランを奪っていったんで？」

「それは利用するためだろ？」

「なんのために？もし、ケルルの予測どおり、ギロロが我輩たちを護りたい者として、手を出すなど指示をしているのなら、キルミランを奪うことで意味がない。キルミランを発動すれば破滅に向かうだけでありますよ？それなのに奪うって・・・」

「ギロロが指示を出していない。って考えるのが妥当だと俺は思う」

「ギロロじゃない誰か？でも、もし、あのレイド人がギロロのであるのなら、ギロロ以外の言うことなど聞かないはず・・・なるほどねえ・・・納得できたであります。」

「・・・俺とテメエ・・・ホントに思考回路が似てるな・・・」

「・・・で、ありますなー」

仮定でしかない思考。二人はある結論まで達していた。だが、所詮は仮説に過ぎない。確証は今回はなかった。

「そっぴゃあ・・・ロギギの奴、なにか隠しているよな・・・」

「ま、気長に待つしかないであります・・・気長にね・・・」

ギロロは黒い布に包まっていた。目は堅く閉ざされており、意識がないように見えた。その傍にはマジョジョがいた。

「だから・・・言っただじゃないか・・・ギーくん、逃げてもいいんだよ？って・・・君はこうなるってわかっていただろ？なんで、逃げなかったの？おかしいよ・・・ボクの約束とか・・・ボクじゃない・・・のに・・・！約束したのはボクじゃないんだよっ？君も知ってるだろっ？オ

レは・・・」

マジョジヨはそれ以上言わなかった。否、言えなかった。後ろにはハギギがいたからだ

「ハギくん・・・盗み聞き？」

「茶化すな。テメ・・・何者だ？俺がマスターから聞いた情報によれば、テメエとマスターは従妹だつてな」

「そつだよ。従妹だよ」

「約束を守るために、ここに来た」

「なんで、そこまで知ってるかなあ・・・それもギーくん情報？」

「まあ。だが、さっきからのテメエの言い方だとテメエはマジョジヨであつてマジョジヨじゃない別の誰かつてことになる・・・

か？」

ハギギの言葉にマジョジヨが黙る

「その顔・・・どうやら、凶星のようだな」

「あ・・・もう、なんでギーくんにはバレてないのに、君にはバレてるかな・・・」

「さっきの一人称・・・それが本来のテメエの性格か？」

「ん・・・どうだろうね。マジョジヨとしての記憶が最初から合つたから君の言うとおりボクはマジョジヨの　　　　　だけど、そうじゃない。性格が違つた」

「性格？」

「一緒だけど、兄さん曰く違つんだつて」

「意味わかんねえ・・・」

マジョジヨはクスクス笑っている。ハギギはレイド星に帰れば、両親、兄がいる。レイド人というのは奴隷という意味だ。兄も自分にも仕える相手は決まっていた。だが、ハギギは相手を見てもどうも心が動かなかった。両親達の反対を押し切りここにきた。

「ねえ・・・ハギくん」

「あ？」

「ハギくんはさ・・・ケロロくんたちを殺せって言われたら殺す？」

「俺はマスターの命令以外は聞く気はねえよ、例え、マスターの命が掛かっていても、俺は連中の命を優先する」

「以外だな・・・」

「・・・。マスターがそんなことを望まないからな」

「・・・。あははっ！そうだねー君の言うとおりだよー」

その後、マジョジョは爆笑していた。ハギギにとっては何が面白かったのかはわからないが、まあいいかと思っている。

「俺は俺だよ？」

「は？・・・マジョジョじゃ・・・ない？」

「流石だな。正解だ。だが、誰かはまだ、内緒だからな」

「なんだ・・・それ・・・」

ハギギがマジョジョの体を使っている者が言っている言葉の意味がわからない。その時。

「ヨオ・・・いい話があるんだが・・・乗らねえか？」

物語は加速する。

加速する物語（後書き）

ケル：前回（前作）に引き続きコーナーっぽい行くぞ。まあたし
ようこりもなく、小説が連載されたな

ケロ：それがこの管理人の醍醐味であります。優柔不断

ケル：それ・・テメエが言うか；

ケロ：しっかし・・ギロ口総受けていうのに我輩との進展がない
ってどうよ？

ケル：知るかつ俺達はフラグすらねえぞ

二人：っていうわけで次、突撃兵組

真実と魂（前書き）

自分が書いている中での執筆は終了しましたっ後は掲載するのみ！

真実と魂

キルミランが奪われて、三日経った。つまり、ギロロがいなくなつて一週間になつたのだ。

ロギギはギロロの家にいた。別にそこが実家でもないのに、自分がある必要はない。夢だった。不思議夢である。

「またか・・隊長のなら今回の事件の手がかりになれば嬉しいな・・。なんか、前回のケロロたちの気持ちわかったかもな―」

苦笑しながら歩いていると、声がした。耳を澄ませば、若干若いガルの声と父親の声だった。

「・・・。ガルの記憶か？うわっ始めてかも・・！」

少々、わくわくしながら、ロギギは部屋に耳を澄ませた。

『マジヨジョが死んだ・・？そんな馬鹿な！あの子・・昨日ギロロと見舞いに行ったが元氣そうだったぞ！』

『突然容態が悪くなったそうだ・・そのまま、亡くなったとな・・諦める』

「え・・？マジヨジョが死んでる？でも、いるんだろ？隊長が会つたつて・・どういふことだ？約束はどうなるんだよっ！」

そのままロギギは闇に包まれた。

何も進展もなし。あれから三日、あれ以来、相手の方は出方を見せていなかった。こちら側にしては情報が少なすぎであつて、場所まで特定できなかった。そんなある日のこと・・

「ガルル中尉殿、話とは？」

「・・・マジヨジョのことで・・」

「マジヨジョ？なにか思い出した？」

司令室にはケロロ小隊、ガルル小隊、反ケロン軍皆がいた。ガルの召集によつて

「それが・・」

「マジヨジョが死んでるって話？」

「は？何いってんだ？ギロロが実際に・・・」

「俺もそう思う。けど、視たんだ。不思議夢でガルルと親父さんが話しているのを」

「・・・そうだ。最初、ケロロ軍曹たちに聞いたとき、まさかと思っ
たんです・・・同名の可能性もあったんです」

「だけど、俺が視た不思議夢とかで、不安になったお前は確認した。
違うか？」

普段と違うロギギの雰囲気ガルル小隊は息を飲む。ケロロたち
は最早今回でよく見るので慣れたモンだ。

「・・・やけに頭が切れるな・・・そうだ。親父に連絡して、確認し
たんだ。マジジ・・・マジヨジョの兄が行方不明になっていることも
聞いた」

「兄・・・？」

「ええ、マジヨジョの両親は両方とも軍人で科学者でした。それが
マジヨジョが亡くなる一年前に任務で殉職し、二人だけになりました。
幸い兄マジジが成人し、軍人としていましたので、病院費は困
らなかったのですが」

「マジヨジョが死んでしまった・・・それ以降マジジは軍人をやめて
行方不明」

「どこから知った？まあいい。その後の流れは今ロギギが言った通
りです。」

「じゃ、その兄貴が一番怪しいってことでありますか？」

「しかし、ギロロくんはマジヨジョ殿と会ったと言っていたでござ
るよ？それはどういう説明になるの？」

「・・・マジジは両親と同じく科学者として軍に所属していた。
クローン技術を専門としてな」

ガルルが言った瞬間、反ケロン軍の皆は一瞬硬直した。

「・・・もしかして、ギロロが会ったって言うマジヨジョって・・・」

「・・・まだわかりません。」

だが、それしかないと思う。ロギギは直感的に思った。ギロロにしかないはずのマジョジョとの約束の記憶、だが、それは自分にもあるもの。ロギギはなぜか、言わなければよかったと思った。その理由はわからないけど、でも、言わなければこれほどまで胸が痛くなることはなかっただろうか。

夏美たちはリビングにいた。ティオラもバイルと敵対した時は傷ついたが今はなんとか回復している。

「軍曹たち・・・無茶してないといいけど・・・」

「平和な暮らして・・・ほど遠いわねー」

夏美は茶を啜りながら、言う。ティオラも苦笑していた。すると、突然ティオラが立ち上がった。

「ティオラくん？」

ティオラはそのまま、窓を開く

「出てきなさい。そこにいるのはわかってますから」

腕を変形させ、正面を向きながら問うた。夏美たちが不思議に思い、庭を見ると、そこに一人のケロン人がいた。

ゴーグルをしており、白衣を着ているケロン人だった。

「ちょ、not敵だからな。俺は！渡すモンがあるから来たんだって！テメエの兄貴とハギギたちじゃ、警戒されて、渡されねえからな。わかったか？」

「・・・」

「信用しねえのはわかる。だが、してもらわなきゃー困る。」

ティオラは警戒したままだった。ケロン人は困ったように頭をかく。

「カガガ・・・？」

「んあ？おお、ガルルじゃねえか」

「ガルル中尉・・・知り合いで？」

「・・・ケロン軍で・・・昔、マジジの上官だった人です・・・」

「そ。まあそうは言っても今は逆転してるがな」

『！？』

カガガの言葉で全員が固まる。

「そこにギロ口もいるのか！？」

「いるなら返せ！」

「ガルル・・オメエのブロンも相変わらずだな・・はあ・・ヒ
ナタナツミってどいつだ？」

「・・・へ・・？私だけど・・？」

「ほらよ」

そういつて、カガガは夏美に向けて投げた。

「・・・ペンダント・・？」

紅色のシンプルのペンダントだった。

「・・・惚れたのか」

「なんで、そーなるんだよ！テメエは！#おかしいだろうが！#」

「いや・・そんなを送るから・・」

「話聞け#まずはっ#それは、ギロ口の魂を封じ込めたモンだ。マジジによつてあいつは意識を封じられていた。このままじゃマジジが解くまでギロ口の意識が戻らねえと思つてな。マジヨジヨの魔術でそれに封じ込めた。体のほうはこつちで任せる。じゃーな」

「！？待て！」

「ちつ・・いねえ・・さっきの奴の言葉が本当なら、それにはギロ口がいるつてことか。夏美、どうする？テメエが持っているか？」

「・・・・うん。あたしが持つてる」

夏美の返答でケロ口とケルルは互いの顔を見合わせ、頷く。

「わかつたであります。何かあつた時は知らせてくれるとー・・」

「OK。知らせるわ」

「かたじけない！」

その日はもう、誰も来なかつた。

「渡された？」

「ああ。かなーり、警戒されたけどな」

「そらそつだろつな・・・さて、後はマスターの体か・・・」

「流石にねー、どう動く？」

「・・・キルミランがあいつが使ったときに動く。」

「了解」

真実と魂（後書き）

タマ：はいっバトンタッチしましたよお！

タナ：ですねえ〜今回、僕達の台詞が少ないですよねえ〜

タマ：でも、タルルよりはマシですよ？

タナ：？

タマ：タルルの場合描写すらないですからっ！

タル：ちょ、師匠っひどいッスよ〜；・；ありますよっ描写っ！次は起動歩兵組ッスよ！

赤い悪魔の真意と統帥の右腕の気持ち（前書き）

時間があれば二話連続投稿したいと思います

赤い悪魔の真意と統帥の右腕の気持ち

夏美は草原にいた。勿論夢だった。

「ここ・・・どこ・・・？」

呆然に周りを見渡す。草原以外は何もなかった。

ザッ・・・と後ろに気配がした。夏美は振り返った。その先には自分が会いたいと願っているのにいなくなってしまった、相手だった。

「ギロ・・・！」

だが、その声は相手に届く前に相手　ギロロによって、口をふさがれた。

『ダメダ・・・オマエガコエラダシタラ、ヨビダシタイミガナイダロウ・・・』

夏美はここにいるギロロが本物だと理解した。

『マジヨジョハワルクナイ・・・ジキニマジジガウゴク・・・』

「（マジジ・・・？誰？）」

『キルミラン・・・カガガタチハミカタダ・・・ハギギニアッタラツタエテクレ・・・ケロロタチニ、シタガツテクレッテ・・・』

そういうと、ギロロは消えて行った。

「ギロロっ！」

夏美は叫んだ同時に目を覚ました。時計をみ、時刻は5時を示していた。夏美はしばらく呆けていたが、すぐにケロロの部屋に賭けて行った。

「ボケガエルっ！」

夏美が部屋に入ったが、ケロロの姿はない。ケロロたちは司令室で修学旅行のように寝ているのだ。夏美はいるであろう、司令室に掛けて行った。

「ボケガエル！」

「うわぁ！？はい！？敵襲でありますか！」

「違うわよ！ギロロが・・・あたしの夢に出てきたの！夢に！」

「・・・。夢え？まったく・・・」

「待て・・・夏美、夢の内容話せ。」

「う、うん・・・」

夏美はすべて夢の中でギロロが言ったことをケロロたちに話した。

「マジジって・・・確か・・・」

『マジジによつてあいつは意識を封じられていた。このままじゃマジジが解くまでギロロの意識が戻らねえと思つてな』

そうマジヨジヨの兄でギロロの意識を封じ込めた張本人でもある。ある意味で言えば黒幕である。

「本当にギロロが？」

「ええ・・・確かに言つていたわ・・・マジジが動き出すってキルミラのことも言つてたけど・・・詳しくはわからなかった・・・」

「そうでありますか・・・」

「・・・夏美、これ、預かつていいか？」

ケルルはペンダントを見ながら呟く、全員がケルルの方に視線を向ける。

「大将？なんで・・・？」

「正確にはロギギにだ。ロギギはギロロと波長が合う。もしかすれば不思議夢も視られるかもしれねえ・・・」

「・・・わかつたわ。ロギギ、はい」

「い、いいのかよ？；これには・・・隊長がいるし・・・」

「大丈夫よつあたしも視れたのだからあんたが視れないはずがない！」

「どんな断言の仕方だっ！；」

力説する夏美にツツコミを入れる。ロギギは不安になった。

「大丈夫でありますよっ！」

「お前もなんで断言するんだっ！；」

ギロロがいなくなつてツツコミに忙しくなるロギギであつた。
「隊長、本気で早く帰つてきて；」

ロギギは涙目になりながら、ペンダントに話しかけた。

そして、早速寝かされたロギギ。ロギギも反対はしないが、寝づらいので睡眠薬をもらうことにした。

「あれ？成功したのかな？」

ロギギは草原に居た。起き上がりまわりを見渡しても草原しかなく、ギロロの姿はなかった。

「場所には到着したけど、肝心の隊長がいなきやー意味ねえよ；」

ロギギは起き上がり、周りをもう一度見渡した後、歩くことにした。

ロギギが不思議夢に入っている頃、ケロロたちはそわそわしていた。

「まだ、ロギが入って一時間もねえぞ；」

「わかってるでありますよっ！でも、不安なんですありますよー！」

「だーっ！うぜえ！暴れるな！#」

結構大変なことになっていた。

再び戻って不思議夢の中、ロギギは十分ぐらい歩き続けていた。

疲れはないがこうも景色が変わらないとつまらないものだ

「たいちよーたいちよーどこですかー？いるなら返事してください」

ガザガザとそこ等辺を漁りながら進むロギギ。先ほどから読みかけているのが見つかる様子が無い。

「ホントに成功してんのかあ？隊長の意識が夢の中にないってことかな？」

ぶつぶつと言いながらロギギは先に進める。しばらくすると湖に出た。かなり澄んでおりケロン星でもあるかわからないくらい綺麗だった。

「うわー・・・綺麗な場所だなー・・・ケロン星にあるかないかな・・・
こんなの」

ロギギは湖に近づいて足を付けた。丁度疲れた気分だったのでここで休むことにした。すると・・・

ガサツ

ロギギが音がする方向、後ろに視線を向けると、ギロロがいた

「隊長！」

「まったく・・・貴様らは・・・」

「う・・・隊長ー！」

「うおっ」

「どこ行つてだよっ！みんな隊長がいなくなって寂しがってんだぜつなのに・・・！」

ロギギがギロロに抱きつき大泣きし始める。ギロロはそんなロギギに驚いたが、頭を撫でしばらく好きにさせていた。ギロロ的には自分の記憶はマジジによって眠らされたという記憶しかない。だが、断片的に夏美と会った記憶もある。何故だろうか

「落ち着いたか？」

「おう・・・」

ロギギが落ち着いてきたので、二人は湖に足を付けながら話し出す。

「では・・・ここは夢でマジョジョが俺の魂を今ロギギが持っているペンダントに封じ込めたんだな？それでお前と俺が同調して同じ夢を視ていると？」

「そ。でも、問題はそこじゃねえんだ。キルミランも奪われた」

「キルミランだと!？」

「その様子だと、本当に知らないんだ・・・じゃレイド人って知ってる？バイルっていう奴と一緒にいた」

「ハギギだな。マジジの組織でレイド人は奴しかない。」

「ハギギって・・・隊長の？」

「そうだな・・・手当てをしたら何故か・・・」

「はははっ隊長の人徳人徳」

「カガガか・・・まさか、ガルルの知り合いとは思わなかったな！」

「会ったことない？」

「ああ」

水をばしゃばしゃとしながら、報告する

「軍ではないな。組織に入って初めて知った。だが、マジジは何をしようとしているんだ？わからん・・・」

「・・・。隊長。俺達のことを気にしないでいいよ？護りたいとか全員が思っている。隊長がいなくなつて、皆悲しんでいる。隊長は悲しくないの？そんなはずねえだろ？」

ロギギが真剣な目をして真っ直ぐギロロを見たギロロは自然と視線を逸らす。

「だが・・・俺は・・・」

「えい。」

「！？」

バツシャーン・・・といい音を立ててギロロは湖の中に落ちて行った。

「なな・・・！何を・・・？」

「隊長。自分が裏切り者だと思つてる？それは違う。睡眠薬をケロ口たちや大将たちに盛つたからそんなこと言うのか？」

「っそうだ。俺はあいつらに薬を盛つた。裏切り者になるっ！」

「誰もそんなこと言つてねえし、睡眠薬のことはガルル小隊しか知らない。裏切りのことは誰も知らない。だからさ・・・隊長は帰つてきてくれよ。皆にとつちや隊長はすっげえ大切なんだ。隊長がいなきやみんな通常じゃねえんだぜ？」

「嘘だ・・・」

「嘘じゃないさ」

ロギギはさざりと言った。ギロロは湖に入つたまま呆然としている。

「ロギギ・・・」

しばらく、沈黙が続いていたが、やがて口を開いた。

「ん？」

「・・・マジジを止めるために協力してくれないか・・・？今更俺が言えることではないが・・・奴はキルミランを使ってマジョジョを蘇

らせる気だ」

「いいけど。蘇らせるって？マジヨジョはいるじゃん。だから、蘇らせるっていうのは間違いないじゃねえの？」

「そこは俺にもよくわからん・・・」

「わかんねえのか；」

「う・・・すまん；調べようと思った矢先に眠らされたからな・・・詳しくはわからんだ。ハギギたちが何故キルミランも奪ったのかも知らん。」

ギロロを湖から引き上げながら、ギロロの言葉に相槌をうつ。

「それは・・・ケロロたちが言っていたけど、キルミランは破壊しかなないんだろ？なら、持って言ってもどうしようも無い気が・・・」

「だから、俺も不思議に思うんだ。マジヨジョはいるのに、蘇らせるとは・・・？」

「今回わかったことは、マジジの野郎がマジヨジョを本格的って言方おかしいけど、本格的に蘇らせるのが目的。隊長がデレた」

「！？ちよつと待て！なんだっ？そのデレたって言うのは！」

「え？ケロロたちに言ったら喜びそうなモンだしなーって。」

ケロロ達の想いをまったく持つてしての鈍感をいかななく発揮しているギロロがそんなことを言ってもわからないだろう。案の定、表情が何を言っているという顔をしている。

「じゃ・・・戻ったら、隊長が協力要請を出し解けばいいのかな？」

「ああ・・・今更言えることではないがな」

「いいよいいよ。あの人たちのことだからきつと、気にしてないしな！。あつても大將は最初かなり、カンカンだったぜ？」

「！？やっぱり、怒つとるではないかつ！」

ロギギはさつと指を突き出し頭にやって、鬼の角を示す。それを見たギロロの顔が青ざめていくのがわかる。

「あははっ隊長、変な顔ー」

「貴様な・・・！」

「ヤベっ」

ロギギはギロロの変化に気づき、すぐさま逃げる。ギロロも追いかけていく。

しばらくすると、それなりに疲れるので二人で野原で寝転がっている。

「はー．．久しぶりかも．．こんなの．．」

「まったくだな．．そろそろ、行くのか？体が透けてるぞ」

「かもね。今度は隊長の体で会おうよ」

「そうだな．．じゃな」

「うん。隊長。またな」

そう告げると、ロギギは消えた。ギロロはしばらく、そこを見ていた。

「ロギギ．．貴様はこうなることが無意識にわかっていたかもしれないな．．だから、あの時もまたなって言ってくれたんだな．．」

赤い悪魔の真意と統帥の右腕の気持ち（後書き）

ケル：へいへい。タイトル解説いくぜ、統帥の右腕・・・俺の右腕はロギギだからなー

ケロ：サラ殿じゃないの？

ケル：おう。あいつには客云々に関しての仕事しかさせてねえ、反ケロン軍の任務云々については一切関わらせてねえからな

ケロ：へえ・・・

幻影と始動

意識が浮上し、戻ったはずのロギギだが、闇の中に居た。

「・・・。あれ？；俺、起きるはずじゃ・・・なかったけ？」

困惑しながら周りを見渡すがどこを見ても一面の闇しかなかった。

「・・・誰かいるー？」

『なるほど・・・ギロロとガルルのクローンということは俺とも従兄弟ということかな？』

「誰だ！？」

『そんなに力カツしなくてもいいさ。俺には今体がないのだからな』
「？何言ってるんだ？」

『言葉通りさ。体はない。ある意味精神だけが存在しているということだ。』

「？？つまり、現実世界でもあんたの体はなくて、ここで精神だけが漂ってるってことだろ？」

『そうだね。簡単に言えばだな。』

ロギギの目の前に現れたのはぼんやりとしていてはつきりとしな
い人物だった。何かを着ているのか布が擦れた音がした。そいつは
指を鳴らすと、ロギギの近くに椅子が出た

『まあ座りたまえ。長い間ここにいと、使い方も自然とわかって
くるんだ』

「へえ・・・」

そこは素直に感心するロギギ。目の前の男の声をどこかで聞いた
ことがあるのだが、それが思い出せない。これほどイラつくのはな
いだろう

「あんたは何してえの？俺を呼び出してさ」

『気をつけると言いたいんだ。連中は厄介だ。そこにある闇に付け
込む。』

「??よくわかんねえ・その連中とかつて誰だよ?わかんねえのに警戒できるわけねえだろう」

『名は・・アビリタ。連中には気をつけた方がいい・・』

ロギギはその名を聞き覚えがあった。ならば何故気をつけなければならぬのだろうか。だが、意識が遠のくロギギが知ることはなかった。

ロギギが睡眠薬を飲んで、夢に旅立ってから、三時間経っていた。五時からしていたので、現在は八時になっている。子供であるタマ・タルル・トロロ・ルククにモアは熟睡である。他もそれなりに眠そうだった。

「ん・・・?」

「起きたか・・」

「たいしょー・・おはよー・・」

「おう。おはよ。」

「何時間寝てた?」

「ざつと三時間ぐれえだな」

「うわ・・かなり、寝てたんだ;」

「そうだな」

ロギギが起きたと言つのに、全員が虚ろな感じた。今喋ってるケルルでさえ、意識が混濁しているのか、いつもの覇気は感じられない。そんなことを考えてると、ケルルがロギギのお腹辺りに頭を下ろした。

「?大将?」

「るっせえ・・寝かせろ。眠い。」

短く言うと、ケルルはあっさりと寝てしまった。ロギギはそんなケルルに呆然としながら、静かに、体勢を変えて、枕を添え、布団をかけてあげる。他にも意識が混濁しているケロロたちにもかける。「そら・・五時から起きてたら眠いよな;」

ロギギは苦笑しながら、銃を取り出し、ギロロと同じように磨き

始める。

ケロロが目覚めて、最初に聞こえたのは何かを磨く音。この音には聞き覚えがあった。何度も家事をしている横で鳴っていた音だ。

「・・・ギ・・・ロロ・・・？」

「あつケロロ。起きた？」

不意に呟いた言葉だが、ロギギに届かなかったのか、届いたのかわからないが振り返った。そこで初めて、この音の発信源がロギギだと気づく

「ロギギ・・・？起きてたんで？」

「うん。一時間ぐらい前かな？皆意識が混濁してたしね」

「そうでありますか・・・悪いでありますな」

「いえいえ」

ケロロは欠伸をしながら、周りを見渡した。

「まだ、寝てるでありますな・・・皆」

「そりや五時から起きてたらな！」

しばらくいた二人だが、上に行くことにした。

「あら？おはよーロギギ。なんか視れた？」

「ばつちり。隊長にも会えた」

「本当でありますか！？」

「おうよっ隊長自身はペンダントに入ってから記憶が曖昧だけどさ。意識がある時の記憶ははっきりしてたぜ」

まあ詳しいことは全員がおきてから話すが

その後すぐに全員が起床し、ロギギは全員に不思議夢で何があったのかをすべて話した。

「なるほどな・・・完全のマジョジョか・・・」

納得したように呟くケルル。

「じゃ、伍長さんが会ったマジョジョさんって何者なんですかね？」

「もしくは、マジジ殿にとって、そのマジョジョ殿は偽物ってことでござるつか？」

「ストップストップ！考えてもキリがないでありますよっ！とにかく、マジジの目的はマジョジョ殿の完全復活でありますっ」

出したらキリがない疑問にケロロは待ったをかけた。かけられた方もケロロの言うとおりなので考えないことにする。

その頃マジョジョは

「はつくしよん！・・・？」

「鼻水拭け。汚いから」

くしゃみをして、ハギギに叱られていた。

「ん・・・誰かが噂をしてるのかな？」

「それはない。」

即答するハギギだが、マジョジョが正解だったりする。

「ぶっ・・・ハギくんの意地悪、ケチ、鬼、根暗」

「なんで、そこまで言われなきゃいけねえんだ！？」

「まあまあ；ハギ兄；」

怒るハギギを抑えるバイル。

「ん？どっか行くの？姉貴」

「うんっ兄さんに呼ばれていてねーじゃ行ってくるよ。何かあったらよろしく」

「ラジャー」

「そのまま死んで来い！#」

辛辣な言葉を言うハギギだが、死なないということがわかっていくからこそ、そういうのだ。

マジョジョは兄・・・マジジの部屋に居た

「兄さん。いったい何用？ギー君の体を返してくれるといいな。」

「お前の役目は終わった。今日、この時をもつてな・・・！」

マジジが手に持っているのは小瓶、それをマジジは落とした。

マジョジョは・・・そこで意識をなくした。

幻影と始動（後書き）

ギロ：前回でもそうだが・

ロギ：ん？

ギロ：俺が中心だと言つわりには・俺の出番がさほどないな
ロギ：。。。あはは・そういわれてみればなー；しょうがなくね？

黎廻：君、使いやす・くはないキャラだって、作者が言ってるし
二人：。。。黎廻、お前はまだ出たらダメ。。。；；；

奪還完了（前書き）

黎廻：さて、今回は長いよ。ギロ口の体を奪還する内容らしいけど
ね・・・どうなるんだろうね？

奪還完了

その頃、ハギギ達はカガガの研究室にいた。

「さて・・まさか、こんなに早く出るとは想わなかったなあ・・」

「マスターをどうするかって問題だな。」

「姉貴・・大丈夫か・・？」

「あいつは殺しても死なねえ#」

「あはははっ。言えてr」

とその時爆音が響いた。

「なんだっ？」

カガガが操作して、映し出すとモニターにはキルミランがいた。

否、キルルがいた

「当等・・おっぱじめやがった・・っ」

カガガがそう呟く。それを聞いて二人は動き出した。無論、ギロ口の体奪還するためである。

「退け！」

ハギギは自前の鎖を使い、どんどん見張りを倒していく。見張りも何度か見知っている顔がある。だが、そんな程度で躊躇はしない。

「兄貴の体を返せ・・！」

バイルも容赦なく相手をなぎ払っていく。カガガはその後ろを大きな機関銃を持ちながらテクテクと歩いていた。

「悪いけど・・返してもらっぜ？」

棒飴をかじりながら言った。

「いやゝギロ口の魂、連中に預けておいて正解だったな。」

「まったくだ」

「でも、連中とどうやって合流すんだ？」

バイルの目にはティオラに会いたくないと明らかに映し出している。

「・・・。後で考える」

「キルル・・・！」

「これがキルルか。始めて見るな」

焦るケロロと妙に冷静なケルル。だが、状況は一刻をも争うのは事実だった。

「いつたい、キルルを復活させて、マジョジョを生き返らせるってどうやって!？」

ロギギが悲痛な声で叫んだ。ケロロたちは実際に体験したからわかる。あれは破壊しか生まないということを。だが、マジジは知らないのだ。

「そんなことより、色々順序が滅茶苦茶だな。ケロロ達から聞いた話によれば、まず×印をつけてエネルギーを奪わねえと起動しねえんじゃ？」

「そのはずですが・・・！」

「軍曹！ミララもないよっ」

そう、今回はケロロも誤算だった。まさか、負のエネルギーを吸い取らずに実行を始めるとは思わなかった。

「ミララが!？」

「うんっ全然見当たらない！」

「ゲロー！」

「隊長、おそらく、キルミランは改造されてる。正確に言えば、あれはキルミランじゃねえ。複製だ」

「複製・・・？」

クルルが言った言葉を反芻させるケロロ。クルルはとんでもない速さでパソコンのキーを叩く。

「ああ。第一ただの科学者がこんな短時間でキルミランのミララや負のエネルギー云々を解除できるはずがねえ俺でも最低で一週間以上は必要だぜえ・・・！」

「じゃ・・・あれが複製って可能性があるってことでありますかー・・・」

「ケロロが呆然としたように呟いた。いつの間にか惑星麻酔がなされていた。」

「あそこから出てきたってことは、さ。あそこに連中のアジトがあるってことだよな？」

「ああ。おそろくな」

「ロギギの呟きに答えるケルル。以外に近い場所にあったと思う。」

「ケロロ。どうする？」

「・・・ケルル曹長。今ケルルの繁殖速度は？」

「大体1分につき二体だなあ」

「我輩たち全員でケルルを殲滅するであります！」

「ギロロは・・・？」

「・・・ここはカガガ殿たちを信じるしかないであります」

「癪だが、それが一番いいんだろうな」

「ケロロの決定にケルルが呟くが反論気味な物はない。ガルルも少々不服なのか顔をしかめているが声には出さなかった。」

「それでは各員、ケルル殲滅を行うであります！」

『了解！』

その頃、ギロロは暗闇にいた。外でケルミランが発動された同時に何故かは知らないがここが真っ暗になってしまった。

「そして・・・妙に体もダルい・・・な・・・」

『それはマジョジョが意識を失っているからだ。だから、ここを息苦しく感じる』

「ギロロは声がした方に顔を向けると浅葱色のケロン人がいた。」

「貴様は・・・あの時の・・・！」

「そう破壊プログラムに飲み込まれた際、自分に呼びかけたケロン人だ。」

「貴様は・・・何者なんだ・・・！？」

『それはまだ言うべきじゃない。だが、これだけは信じてくれ。私

はお前の味方だ。お前を壊したくない。』

「どう・・・」

ギロロが尋ねようとしたが、世界が変化した。あちこちに輝が入ってきている。ギロロの意識も遠くになった。

「だあー！うぜえ！マスターの体が見つからねえぞ！」

「おつかしいなあー・・・調べではここで合ってるはずだが・・・」

「あ。ハギ兄！いた！あそこだ！」

バイルが指指したところにギロロの体が黒い布に包まっているギロロがいた。

「マスター！」

ハギギはダツシュでギロロの元へ向かっていく。が、何かにぶつかって転げる。

「・・・；ハギ兄・・・大丈夫？」

「何してんだ；お前」

「何か壁みたいなのがあるンだよ！#」

ハギギは怒鳴りながら言う。カガガが近づいて触れると、確かに透明な壁があった。

「こりや・・・」

「解けるか？」

「ああ。マジジの野郎、俺達がギロロの魂を抜いたのを見抜いてやがった。」

「へ？でも・・・！なんも言ってねえじゃん」

「ああ、多分あいつはもうギロロのことなんざどうでもいいだ。だから、こうして腐敗しないために保存したんだ」

カガガは壁を叩きながら、冷静に分析する。カガガたちはバレているとは思っていなかった。だが、マジジが無関心になったのは好都合だ。

「悪い、時間稼ぎヨロシク」

「十分なっ！」

カガガの言葉にハギギが答えた。

ケロロ達は分裂していったキルルを倒していく。その時夏美が声を上げた。

「ゲロ？どうしたんですか？」

「・・・なんか・ギロロの気配がなくなった気がする・・・」

「ゲロ！？なんですと！？」

それは困る非常に困る。

「どうということ？」

ロギギが夏美に近づき尋ねる

「なんか・その、ペンダント受け取ってから、いつも希薄だけど、ギロロの気配は常感じてたの・・・」

「うん・それは同感。それがなくなっただってこと？」

「さらに希薄になった気がするの・・・」

「大丈夫だつて！隊長が死ぬはずねえ！だから、帰ってきたら、言つてやるうぜ。遅い！って！」

ロギギは笑いながら、言う。

「・・・そうね。絶対文句言つてやる！」

「だったら、奢らせるか。まともに食えなかったからな。いきなり団子。」

「賛成！」

ケルルの意見に同意して、ロギギはキルルに向かって行った。ケルルもキルルの塔を一瞥してからキルルに向かう。

「大丈夫・あんたはこれぐらいで死なないもんね・・・」

夏美もペンダントを一度握り締め、キルルに向かって行った。

「おいっ！まだかつ！？」

「後少しだ！」

ハギギたちは元仲間を相手にし、ギロロを阻む壁を解除していた。
「よしっできた！」

カガガが言った直後、鎖の擦れる音がした。カガガが後ろを見ると仲間が鎖によって縛られていた。

「わー・・・お見事」（棒読み）

「棒読みで言うなら言うなっ！」

ハギギはそう言いながら、ギロロに近づいていく。

「冷てえ・・・」

「そらな。今は死んでるからな。」

「・・・マスターがゾンビっていうレイド人っていると思うか？」

「知るかよ；っていうかゾンビは体が腐っている人間のことだぜ；」

「ボケかましてる暇があったら、合流しようぜ！；」

バイルの言うとおり今はボケをかましている場合じゃない。早く合流しなければならない。

バイルがギロロを抱え、走る。

「後は・・・魂だっ」

ギロロが奪還完了された頃、ケロロたちはキルルに妙な感覚を覚えた。

「んゝ・・・なんでありましょうか？この感覚は・・・」

「さあな・・・」

だが、その感覚が曖昧すぎて正確になにが違和感なのかわからない。ケロロは必死に前回のキルミランのときを思い出しているがまったく違和感が思い出せない。

その時

「ヒナタナツミ！」

「カガガ！？」

叫ばれた方を見ると、カガガたちがこちらに向かっていた。

「ギロロ！？」

「バイルくんっ」

「はあはあ；後、説明・・・よろしくっ！」

「体力がねえなら走るといいう選択肢を入れるな！；#ヒナタナツミ

ッそのペンダントを壊せ！」

「へっ？これのことっ？」

「そうだ！ってかキルル邪魔だ！」

夏美はキルルを切り裂きながら、ハギギたの方に向かう。ハギギもこちらに来るキルルを切り裂く。

「でもっ壊したりしたらギロロがっ」

「問題ねえ！マジョの奴はペンダントが壊れたらマスターの魂が体に帰るように設定されているっだから・・・！壊せ！」

「・・・わかつたわ！」

一瞬夏美はハギギのことを疑ったが、夢でギロロが言っていたことを思い出したのだ。

『カガガタチハミカタダ・・・ハギギニアツタラツタエテクレ・・・ケロロタチニ、シタガツテクレッテ・・・』

その言葉を思い出したのだ。ならば自分はギロロを信じると思いながら、ペンダントを思いっきり振りかぶった。だが、キルルがその手を掴む。

「えっ？」

「しまったっ」

「夏美殿おー！」

一瞬どうすればいいかわからなくなったが、ケロロの声でそちらに視線を向ける。

「ボケ・・・ガエル・・・！」

夏美はケロロに向かって、ペンダントを投げた。

「ナイスピッチでありますっ！って、キルル来たー！」

追ってくるキルルに相手をしながら、壊す機会を伺う。

「（タママノタナナ）インパクト！」

二人の技でケロロの前のキルルが一掃された。ケロロはチャンスだと思い。振りかぶる。後ろにもキルルがいるが気にせずに振りかぶった。

パリン・・・！

合流と裏切りの隠蔽（前書き）

すみません……昨日友人とプール行ってまして、更新が出来ませんでした……

合流と裏切りの隠蔽

「・・・かたじけないでありますっ八ギギ殿」

「お安い御用だ」

ケロロの後ろのキルルは八ギギの鎖によって貫かれていた。

「ギロロはっ？」

「バイル！マスターはどうだっ？」

パンドントが破壊されたことによつて、ギロロの魂は体に戻つて行つた。

「体が暖かくなつた！大丈夫、戻つてる！」

バイルの言葉で全員が安心した。

キルウウウウ！！

「しっかし・・・マジジはどこだ？」

機関銃を持ちながら、カガガは背中合わせのガルルに言う。

「我々はまだ、マジジを目撃していない。そっちにもいなかったのか？」

「ああ・・・」

「案外キルルに飲み込まれていたりしてな」

いつの間にか傍に居たケルルがそんな意見を出した。一応基地内は調べたがマジジらしき人物はいなかった。

「・・・。おい、否定しろよっ！カガガ中将殿」

「元だつて・・・；なんで知つてんだ？つてガルルに聞いたら一発でわかるよな；」

中々、ケルルの意見が否定されなかった。まさかとカガガも思うが・・・

「あいつはかなり狂つてたしな・・・飲み込まれる阿呆やらかしても、おかしくはねえな・・・」

「・・・。そうか」

「カガ兄！」

「あ？・・・！？」

バイルに呼ばれたかと思うと、ギロロが降って来た。

「おわっ！？おいっバイ・・・ああ。わかった忙しいんだな」

バイルの周りにはキルルが大量に居た。

「ギロロはっ？」

「ガルル、テメエは目の前の敵に集中しろ。安心しろ、息はちゃんと吹き返してる」

カガガが言くと、明らかに安堵の気配が二つした。

「マジヨジョっていうやつは？」

「さあ？マジジに呼ばれて以来行方不明だったの。」

「・・・ん・・・？」

「ギロロっ」

カガガが抱いていたギロロの意識が戻ってきた。目の焦点が合っていないがとりあえず安堵する。

「・・・・・・カガガ？」

「おい、今、俺忘れられてたよな！」

「・・・なんだ？どういう状況・・・？」

頭が回っていないのか、ギロロは困惑顔でキルルを見ている。

「よおギロロ。おはよーさん。後で殴らせろよ？今の状況は・・・キルミラン（改悪）が発動中だ。」

「ケルル・・・」

『先輩つ上だ！』

ギロロがケルルに話しかけようとしたら、いつの間にか付けていた通信機からケルルの声がした。

ギロロがケルルの指示で上を見上げると、キルルが攻撃してきた。それを皆散って避ける。

「ケルル・・・」

『よお先輩。お久しぶり』

「ちよつと！我輩たちもいますよ！忘れるなー！」

ケロロもキルルを倒しながら主張していた。

「隊長。」

「・・・ロギギ」

「久しぶり。隊長」

「・・・ああ。貴様の言うとおりになったなロギギ。」

「たいちよーの自業自得ー」

「うつゝゝゝ」

何も言い返せないギロロであつた。

「皆さ、怖かつたんだぜ？大将だつてさ」

「それは・・・すまん；」

「まっ隊長が無事ならいいや」

ロギギはキルルを打ち落としていく、ギロロもロギギから借りた銃で撃ち落す。すると、一気にキルルの数が減つたのだ。

「なんだ・・・？」

「一気に減つたでありますな・・・ギロロっー！」

とりあえず、皆がギロロの元に集まつた。

「ケロロ・・・皆・・・その・・・」

「ほらほら。隊長ー頑張れー」

ロギギに押されながらギロロは口ごもる

「その・・・俺は・・・お前たちに酷いことをした、すまない・・・」

「ゲロ？酷いことつて？」

「だからっ睡眠薬とか仕込んで・・・！」

「サラー俺達はギロロからもらった菓子食つ前から眠たかつたよな？」

「はいっギン兄が来たらすつごく安心して睡魔に負けたんですよねっ？」

「・・・？は？」

ケルルとサラの言葉に素っ頓狂な声を上げるギロロ。自分が睡眠薬を・・・

「だから・・・ケロロたちにも・・・！」

「はて？我輩はその前夜ガンプラ作りで徹夜してすごく眠たかったんでありますよーちなみにタママも一緒に作ってたでありますから、タママも徹夜でありますよー」

『俺は隊長に頼まれた新兵器開発で徹夜してたからなあ・・・』

「拙者はその前夜、眠れなかったんでござるがギロ口くんのお茶を飲んだら安心して寝れたでござるよ」

次々に出てくるケロ口たちの言い訳でギロ口は混乱してきた。

「し、しかし・・・手紙っロギギに手紙渡したはずだっ！」

「ゲロっ？手紙？それは知らないでありますなあー」

「隊長、変なところで頑固だぜ？手紙？ああ、大将に渡した。」

「さて？確かに手紙を受け取ったが、ギロ口からっていうことは聞いてねえな」

「・・・っ」

開いた口が塞がらない。とはまさしくこのことだとギロ口は改めて思った。

「ギロ口」

「な、夏美っ？」

「・・・ギロ口のバカー！」

「！？」

夏美はギロ口に向かって叫んだ。

「自分で何勝手に抱えこんで、あたしたちに相談もせずにとっかに消えるのよ！皆、探したんだからねっ理由はこの際どうでもいいわ！抱え込まずにあたしたちに相談してくれた方がいいじゃないのよ！相談ぐらい乗ってあげるし、ボケガエルたちだったらあたしたちと違って相談にも乗って、問題を解決してくれるぐらいの力はあるじゃない！なんで・・・消えてるのよ・・・」

後半になると夏美の声は涙声になり、完全に最後には泣いていた。

「な、夏美；その、すまん・・・」

「帰ってくるわよね？」

「そ、それは・・・」

「ケロロ小隊起動歩兵ギロロ伍長はスパイ活動をした際、敵の捕虜になり、生命活動を一時停止させ、再度生命活動を開始した」

ギロロが口ごもっている、今まで黙っていたガルルが発言した。
「先に入っていたハギギの協力の下活動」

「そうだな。俺はマスターに言われてあの組織に先に侵入したし、別にマスターは皆を裏切ったわけじゃない」

「はい。けってーっと。処分はケロロ小隊隊長ケロロ軍曹へ。」

最後に決定したのはカガガだった。

「あ？いいの？」

「隊長さんだし」

「では・・・ごっほん。ギロロ伍長、今回の事件の行為の処罰を言い渡す！」

「あ、ああ」

緊張しながら、ギロロは結果を待つ。

「今回のことは不問とする！ただしいきなり団子全員分の奢り代及びマジョジョ殿たちの救出はギロロがするであります！」

「すっげえ・・・そんな処罰・・・聞いたことねえ・・・っ」

「カガガ、笑いすぎだ；」

カガガはケロロの言葉を聞いて、爆笑していた。

「バイルくん・・・？寂しいの？」

「なっ！誰が寂しいだ！全然だぜっ兄貴は仲間のところに戻って幸せそうだからいいんだよ！」

二人の兄弟が騒いでいると、ギロロがその様子に気づいた

「おいっバイルと・・・えと・・・」

「ティオラ殿であります。バイル殿の弟でありますよ」

「ティオラもこっち来いっ」

手で来い来いをしながらギロロは言った。その瞬間。

キルウウ！！

真の願い

キルルの声が木霊した。キルルが増えているが少し代わっていた。
「・・・あれ？形が違うであります・・・」

「なんで・・・？」

ケロロが言った通り、キルルの形状が違っていた。白色のはずなのに色が灰色になっていた。

「ギロロ・・・マジョジョ殿がどこにいるか知ってる？」

「・・・。生憎だが意識がなくなっているとは聞いたがどこにいるかは聞いてない」

「聞いた・・・って誰に？」

「浅葱色のケロン人だ」

ギロロそういった瞬間、ケロロたちが息を飲んだのがわかった。

「？ケロロ？知り合いなのk」ほらほら、ギロロ。目の前に敵がいるからな。「う、うむ；」

ギロロの疑問はカガガの声によって遮られた。目の前にはキルルが大量に居た。

「なあ・・・マジジがあれの中にいるんなら、呼び出されたマジョジヨもあんに居るんじゃないか？」

「確かになくはねえ意見なんだがな・・・」

ケルルの意見にカガガが思案する。

「はいっギロロの腰にこの縄を縛って・・・」

「ああ・・・もう少しキツめでも構わん気がするぞ」

「マスター、危険だと判断したら即効合図をしてくれよっ？ぜってえー引っ張るから！」

「ハギギもちゃんと鎖で縛れる？あの巨大キルル。」

「舐めんな。マスターのためならやってやる。」

「一応手伝う。」

「おう。」

ケロロが縄をギロロの腰に縛っており、その隣でハギギがオロオロし、その後ろでロギギが見当違いな心配をしていた。

「何してんだ? ;」

「ギロロの出した提案であります。クルル曰くあのキルルのお腹から中に入れるらしいでありますから、ギロロが入ると」

「なっ危険すぎるっ」

「わかつている。だが、今回のことは俺が巻いた種だ。俺が解決するのがいいし、おそらくあそこにいるんだろうなあいつらは」

ギロロの言葉でケルルは唸った。前回もそうだったが自分はずくづくギロロに甘いようだ

「よし。これでいいか。ハギギ、頼む」

「了解!」

ギロロの合図によって、ハギギは手を地面について、力を入れる。地響きがして、巨大キルルの下から無数の鎖が出てきた。

ギロロはケロロのソーサーでキルルの前まで来る。

「ギロロッ・・・」

「・・・大丈夫だ。今度はちゃんと戻ってくる。」

そういつて、ギロロはキルルの中に入って行った・・・

「俺達はキルルの雑魚をやるぞ! 鎖は傷つけさせんな!」

『了解!』

キルルの中は薄暗いと言った感じだった。落ちていく中、ようやく止まった。

「マジジョーマジジー」

ギロロが呼ぶが返事は無かった。ギロロはもう少し奥に進んでいくと、声がしてきた。

「・・・? マジジ・・・?」

薄暗い世界の中でそこだけ唯一光を持っていた。

中にはマジジがいた。昔の姿で

「・・・? これは、過去なのか? それともキルルの中で起こってい

る現象なのか？・マジヨジョ！？」

そして、もう一人はマジヨジョだった。それでも幼い。

「どういうところだ・・・？」

『マジヨジョ・・・ああ、私の唯一の光。やっと会えたね・・・』

「・・・っ」

ギロロはその光に入って行った。

「！？誰だ！？」

「・・・わぁ・・・ギーくんみたい」

マジジが警戒してマジヨジョを背後へやる。マジヨジョは暢気に自分を当てた。

「・・・これが貴様の幸せか？マジジ。こんな形でマジヨジョを復活させて、満足か？あいつがこんな結果を望んでいたか？」

「な・・・なんの・・・話だ・・・？」

「こんな空想、マジヨジョを侮辱するような風景が貴様の望みだったのか！？」

ギロロはなぜか苛立っていた。元々短気な分熱くなるのは早かった。マジジのことはあまりよく知らない。兄・ガルルと同年でほとんどマジヨジョとしか遊んで居らずマジジのことはガルルの方がよく知っているはずだ。

だが、マジジのことでこれだけは知っていた。マジヨジョのことを彼は誰よりも大切にしていた。何よりもマジヨジョの意見を取り入れたりもしていた。そんな彼がこんな結果を望むとは思っていなかった。

「貴様はマジヨジョのことを一番理解しているんじゃないのか？俺も幼い頃はよくマジヨジョと貴様が一緒なのを見て、俺もガルルに甘えたこともあった！マジヨジョにとって貴様が一番尊敬できる人物だっ何よりもマジヨジョを大切にしていた貴様が何故こんな風にした！・・・確かにマジヨジョが死んだことは俺にもショックだった。唯一身内の貴様なら俺が想像できないショックがあったんだろう。だから・・・貴様はマジヨジョのクローン・・・今のマジヨ

ジヨを作り出した。だが、それでは完全じゃないと思った貴様はキルミランを利用した・・・違うか？」

「ち・・・違う！私はマジョジヨを完璧に蘇らせる！そう誓ったんだ！」

ギロロの勢いある言葉で一瞬ひるんだマジジだが、すぐに言い返す。

「私にはマジョジヨしかいないんだっあの子だけが私のすべてだったんだっ・・・」

「・・・それは・・・貴様が・・・マジョジヨの死を受け入れていたからではないか？」

ギロロがふと気づいたことを口にし、呟いた。マジジは呆然としている。

「な・・・何を・・・」

「貴様は心の・・・頭のどこかで理解していたんだ・・・マジョジヨが死んだという事実を。だが、それを貴様は認めたくなかった。だから、こんなことをした。違うか？俺が知っている限りそんな口調ではない。貴様はそんな自分を誤魔化すためにそんな口調にし、隠した。」

「違う・・・！私は・・・！」

「もう、諦める。ギロロの言うとおりだ。俺はどこかで理解していた・・・だが、混乱していたのは事実だ・・・だから、お前の言葉に乗っってしまったんだろう」

「くそっ・・・私はお前の想いを叶えてやろうと思っているだけだぞ！？」

「そんなことをしても、マジョジヨは喜ばないし、俺も望んでいない。」

幼いマジョジヨの口から発せられるのはマジョジヨじゃない誰かの言葉。その言葉が誰なのかはいくら鈍いギロロでもわかつている。「早く返せ。それは俺の体だ。」

「何故っ？何故だ！お前はこれを望んでいたのだろう！？」

「違う。それはマジジの願いではない。マジジの願いを捻じ曲げた貴様の望みだ！」

“マジジ”は徐々に顔を歪めていった。ギロロはそんなマジジから視線を外さない。

「ギロロの言うとおりだ。俺はこんなのを望んでいない。例えば望んでいたとしても、俺は死を選びあの世で一緒に過ごすことを望む。」

「くそつくそつ！」

“マジジ”が喚くとマジジの体はガクンとして、倒れた。

「ど・・・どうなったんだ・・・？」

「どうやら出て行ってくれたようだ」

幼いマジヨジヨから発せられる言葉はやはり自分の従兄のものだった。

「マー兄・・・？」

「・・・。今でもその呼び方で呼ばれるとは思ってなかったよ」

「ち、違う！今のは違う！」

「はいはい（相変わらず可愛いーな・・・ガルルが愛でるのもわかるよ）」

クスクスと笑われ、ギロロの顔はさらに真っ赤になっていた。そこでギロロは気づく

「なあ・・・マジヨジヨはどうなるんだ？」

「ん？大丈夫・・・だと思いたい。この中にはいるはずだ、これは思念体、簡単に言えば俺の記憶から構成されたマジヨジヨだから」

「なるほどな・・・」

マジヨジヨの体が徐々に消えて行き、最後には意識不明のマジジとギロロだけが残った。

その頃外ではいまだにキルルが増量していた。巨大キルルは動くとしてゐるがハギギによる鎖によって、鎖が擦られる音を出しているだけだ。

「キリがねえな・・・」

ケルルが誰とも無く呟く、すでにボロボロだった。他を見渡すと口ギギやケロロたちも傷だらけだった。無傷なのは誰も居ない。

キルウウウ！

「いつつ・・・！」

「ハギギっ大丈夫か？腕が・・・」

ハギギの腕はすでに血だらけだった。鎖はレイド人と証とでも言える。

キルルが侵攻しようとしている。

「あの野郎・・・力を増してる・・・？」

「なんか、色が代わってないか？」

キルルは段々色を変えていった。真っ白から灰色になっていく。

『先輩！聞こえてるかっ？』

「クルル？」

ギロロの耳にクルルの声がした。

「どうした？」

『外でキルルが暴走し始めた！早く二人を回収しねえとハギギの鎖が間に合わねえ！』

「わ、わかった！」

ギロロはマジジの体を抱え、マジヨジヨを探す。だが、あたりは一面薄暗い世界。マジヨジヨらしきものはいなかった。

「・・・マジヨジヨ！貴様はこんな結果でいいの catt？俺が知ってるお前は何事も諦めないで・・・マジジのことが好きですごく尊敬していてそれを素直に言える奴だ！誰であろう catt お前はお前なんだっ！」

『・・・でもねギーくん。ボクは違うんだよ？ギーくんと約束したのはオリジナルのボク。今のボクじゃない』

「そんなモン関係ない catt お前はどうかんだ？お前はどうか catt お前はお前だろう catt」

『ギーくん・・・』

どこからか聞こえてくるマジョジヨの声にギロロは叫ぶ。

「だからっ早く帰るぞ！ハギギやカガガ、バイルも待っているし、マジジだって、ここでお前が死ぬことを誰も望んじやいない！」

『ギーくん・・・ボク、生きてていいの？』

「当たり前だろう！」

マジョジヨの言葉に即答するギロロ。

「だから、ほら・・・早く帰ろう・・・」

ギロロがどこからともなく手を伸ばす。しばらくするとその手を掴んだ

「ギーくん・・・ただいまっ」

マジョジヨはそのままギロロに抱きついた。その顔は今幸せそうだった。

「おかえり、マジョジヨ。さて、時間がないようだ。出るぞ」

「う、うん：」

ギロロはケロロに引き上げる合図を出した

真の願い（後書き）

今日はここまでかなっ？

核

「合図きた！モア殿！サラ殿！」

「了解！」

ケロロに言われてアングルの姉妹はスピアの力を使って、ギロロの腰についている縄を引っ張った。

どんどん縄がキルルの中から出てくる、苦しいのかキルルが雄たけびをあげる。そうなれば鎖は音を立てる。

「頑張れハギギ！もう少しだ！」

「んなこと・・・！わかってるっ！」

ロギギも同じく鎖を手にする。その時

キルウウ！

バチ・・・バチバチ！

キルルが雷を纏い始めた。勿論鉄でできている鎖にも繋がるわけ・・・

「ッアアア！」

「ロギギ！」

「ハギギっ」

ケルルとカガガが二人を回収する。鎖はどんどん切れていき、ついにはキルルは自由になってしまった。

「サラっ早く！」

「は、はい！」

気絶しているロギギを背負いながらケルルが空中に居るサラに声をかける。

「ケルル、カガガ殿・・・！二人の様子は？」

「大丈夫だ・・・気絶してるだけ」

「ハギギもだ。」

「カガガ殿はハギギとロギギを連れて基地に戻って欲しいであります。手当てを・・・」

「ケロロ―勝手に俺を戦線離脱させんな」

「同じくだ・・カガガ、下ろせ。もう大丈夫だ」

ケルルたちの背中で目を覚ました二人。

「ロギギはともかく、ハギギ、お前は手当てを受ける。それ以上鎖を酷使すると能力を失うぞ？」

「マスターが大変なのに俺が暢気に手当てを受けられるか・・っ」

「ほらあ・・言わんこっちゃねえだろ」

「ギロロがいたら、手当てを受けろって真っ先に言うでありますよ！」

「なら、言おうか？」

「おー！言っちゃってよ・・ん？」

ケロロが慌てて、後ろを向くと、ギロロがマジョジョとマジジを抱えてそこにいた。

「ギロロ！出られたんでありますなっ！」

「まあな・・」

「なにやら納得してねえ顔だな」

「いや・・ちよつとな」

ギロロは苦笑しながらマジジに視線を落とす。

『隊長、いいムードのところ悪いが、キルルの様子が変だ。そこにいたら、危ねえ！』

ケルルの通信でケロロはキルルを見上げた。キルルは灰色になりながらも、自分の目の前で陣を出した。かなり複雑そう陣です。

「・・・わーい・・」(棒読みです)

「棒読みで言ってる場合かつ撤退するぞ！」

ギロロがマジジたちを抱え込んだまま、ケロロに言った。ケロロもその言葉ですぐに動く、皆と合流した、その時

ドオン！

陣から光が出て町を焼き払いました。

「なっ・・・どう・・なっ・・？」

「惨いでござるな・・」

「前に作った偽奥東京市にキルルたちを転送させといて正解でしたね。」

タママが暢気言う中全員がその言葉に賛同した。勿論そんなことを知らされてないギロクの頭上には？マークがある。

「ああ・・マスターは知らないと思うけど、マスターが入った瞬間に偽物の奥東京市にキルルを転送させたんだって、だから、目の前の町が破壊されても、偽物だから本物に影響はねえってさ。」

「そ、そうか・・」

ハギギの説明で理解したギロク。そつとマジジたちを下ろして、ケロクたちに近づく

「ケロク・・話しておきたいことがある。」

「ゲロ？」

怪訝な顔をするケロクにギロクが先ほどキルルの中で偽物マジジとの会話をすべて伝えた。脱出する時に聞こえた声も

「奴は言っていた。『外に戻ったら覚えていろ。戻ったことを後悔させてくれる』とな、それを意味することはわからんのだが・・」

「まあ・・それがこの現状ってことでありましような。マジジ殿が何かに乗っ取られて、体に乗っ取られたマジジ殿はマジヨジョに非難をしなくてはならないはめになったというわけでありますか・・」

「確かにマジジが私とか言う奴ではないな。軍に入って公以外では一人称は俺だったはずだ。」

ケロクの言葉でガルルが同意を示す。この中で一番詳しいのはガルルである。

「しかし・・あのキルルをいっただうするかであります・・」

ケロクはいまだに陣から光を出しているキルルを見る、到底簡単にやられそうにはないと思う。

「一斉射撃してみるか？」

「それで倒れるかな？」

「やってみなきゃわからん」

「そらそーだ」

起動歩兵組みは暢気にそんなことを言い出す。ケルルもそれを無言で聞きながらどうするかを考えていた。

「ケロロ。ここは悩んでいてもしょうがねえ、なんなら、ロギギたちの提案に乗ってみるのはどうだ？」

「一斉攻撃？・・・そうでありますなあ悩んでもしょうがないしね」

ケロロがそういった。起動歩兵である、ギロロ・ガルル・ロギギ・カガガの四人でキルルの前方に出た。

「行くぞ！」

「了解！」

ガルルの号令により、ギロロたちの攻撃がはじまった。ケロロやタママはキルルの背後に回り、攻撃を加える。

キルウウ！

陣が光って光線を出す。それは当然前線に居る起動歩兵たちがいる。

『先輩・・・！』

「大丈夫だっなんとかかわした！」

その言葉で後方にいるメンバーは安堵する。だが、キルルは光線をやむ気はないらしい。

『隊長・・・』

「なん、でありますかっ？」

『わかったぜえ！あのキルルを止める方法がな！』

「ホントであー ドゴン！」

「ギロロ、ロギギっ」

「いててっ平気平気。ちょっと掠っただけだしな？隊長。」

「うむ。大丈夫だ。クルル、通信を続ける」

ケロロもギロロを見た目で大丈夫だと判断し、クルルに続きを促す。

『キルルの中にある、核を破壊すりゃいい、あれは元々改造された奴だ。おそらくキルルの中に核があるんだろう』

「それを破壊すればいいのだな？」

『ああ・・・って先輩？まさか、行く気じゃねえだろうな？』

「ん？行くに決まって「ないから！」」

ギロロの言葉を途中で遮り、ケロロたちが一斉に言いました。

「ギロロっさつき、ただええ入ってたんでありますよ！？次はどんなことがあるか分からないし、さつきのはマジジ殿がいてくれたからなんとかなったようなモンでしょ！？」

ケロロはギロロの肩を掴んで、ガクガクと揺さぶる。

「・・・そのマジジはどこ行っただ？」

「あ？サラたちが見てるはずだが・・・」

『お兄様っマジジさんが・・・マジジさんがいませんっ！』

ケルルが言った瞬間サラから通信が入った。

「な・・・だと・・・？」

『少し目を離れた瞬間にいなくなってる・・・』

「ちっケロロっマジジが・・・」

「わかってるでありますっ」

ケロロも通信内容を聞いたので顔が蒼白になっている。

「こんな時に・・・！」

「な、なあ・・・ケロロ、大将。もしかして、マジジの奴・・・キルルのとこに・・・」

ロギギが発言途中でギロロが双眼鏡を転送させ、キルルを見る。

すると、キルルの目の前にケロン人が居た。マジジだ。

「いたっロギギの言うとおりだっ」

「何をしてるんですか！？」

マジジはギロロたちに気づいたんだろう。何かを話しかけている。遠くから見ているケロロたちには何を言っているかわからない。

「『後始末は俺がするよ』・・・と申しているでござる」

「まさか・・・通信内容を聞いてたのか！？」

ドロロの言葉にギロロが先ほどケルルとの会話を聞かれていたのかと思った。

『いやあ・・・あいつが改造したんだ。隊長たちの会話を聞いてなく

てもわかってるんだろうな』

「なるほどな・・・乗っ取られても記憶はあったから核のことも知ってるのか・・・」

『大将、止めるなら止めた方がいい。』

「あ？」

『核を壊すと言うことは一気にその破壊された衝撃も一緒に受けるということだ。そうすれば疲労しているマジジの命はない』

『っ！？』

ルククの言葉で全員が息を飲む

「マジジっ！止せっ！逃げろお！」

ガルルとギロロが叫ぶが、キルルはこちらに視線をギロロたちに向ける。全員がマジジに逃げろという中でマジジは少し微笑んでキルルの中に入って行った。

「マジジ・・・！」

核（後書き）

マジ：俺、早速死亡フラグかなー？

ギロ：おま・・・！（俺の苦勞を返せっ）

黒き光と向かう終焉

ガルルの声はキルルの雄たけびによって、掻き消された。

だが、それでキルルが早くも止まる訳がなく、こちらに向かってきた。

「・・・マジジが中に入っている間、我輩達はキルルを食い止めるであります！中に入るのは許さないっ特にギロ口とガルル中尉殿っ」

ケロ口の号令により、行く気だったのだらう悔しそうにガルルとギロ口が顔を歪めた。

「二人の気持ちはわかるであります。しかし、ギロ口たちが中に入ってマジジがどんな気持ちをする？そこを考えろ」

ケロ口は銃を転送させ、他の皆と合流しながら銃弾をキルルを飛ばす。

「・・・ガルル。ケロ口の言う通りかもしれんな・・・」

「・・・わかつている・・・そんなことはっ」「そうか・・・先に行っている」

ギロ口もケロ口と同様合流しに行った。ガルルもしばらくそこにいたがキルルのほうに振り返り、向かって行った。

「クルル、核が壊れるまでの推定時間は？」

『大体十分ぐれえだな。』

「それまで持ちこたえればいいんだな。」

ギロ口が呟いた同時に視界の隅に黒い何かが横切った。

「・・・？」

「よぉ・・・ギロ口。久しぶりだな・・・」

「ノラ・・・！」

ノラはギロ口を通り過ぎると、キルルの頭上に来た。

「ノラ？何をする気でありますか？左目の包帯取ってるけど・・・」

！」

ケロロがオロオロしながら、頭上にいるノラを見上げている、ノラは左目にしていた包帯を取ってる。黒い瞳からは黒い雷が周りに発生していた。

「俺も活躍・・・一応はしとかねえとな？」

そういつて腕を上げて、剣を作り出し、それをキルルに突き刺した。ノラから黒い雷が発生し、キルルが雄たけびをあげる。

「ノラっ無茶はやめるでありますっ！」

「こうでもしねえっと・・・っ」

しばらくすると、ノラが左胸を抑え、ふらりと落ちる。ケロロが慌てる中それを夏美がキャッチした。

「夏美殿、ナイスキャッチ！」

「ノラっ大丈夫？」

「ケホッ・・・なんとか・・・」

「大丈夫じゃないじゃない！血吐いたわよっ！？」

ノラも夏美に言われて手を見ると吐血した痕があった。

「だいじょーぶ・・・力を使いすぎただけだ」

「ホントにつ？」

「おう・・・」

夏美はノラを下ろし、ながら、聞く。

そして、キルルの雄たけびが鳴り、夏美がキルルのほうに視線を向けると、剣は消え、黒い雷がまだキルルに纏っており苦しんでいる。

「な・・・なんか・・・ヤバくない？」

ケロロが呟き、全員がそう思ったのか頷く。その瞬間・・・

『皆っ逃げる！！』

ルククの声が通信機からした直後、キルルが光、その光はケロロたちを覆った。

黒き光と向かう終焉（後書き）

ケロ：最後の最後のいいところ取りでありますなあ・・・
ノラ：クツクツク・・・俺あ長期戦向きじゃねえからな
ギロ：知つとるわ！；

全員無事

「・・・そう・・・軍曹・・・軍曹ってば！」

「・・・冬樹殿・・・？」

「よ、よかったあゝ」

ケロロが目覚めたとき目の前には冬樹がいた。

「ど・・・どうなって・・・？キルルはっ？」

「キルルは消滅した。ってクルルが・・・」

「そ、そうでありますなあ・・・」

ケロロが安堵しているとまたもやハツとして

「他の皆は・・・！？」

ケロロが周りを見渡すと、皆が起き上がっているところだった。

「ケロロ・・・全員無事だ・・・あの爆発があつてよく助かったな俺ら・・・」

ケルルがケロロに近づきながら言う。ケロロはケルルの言葉が気になりさらに周りを見渡すと・・・

「・・・。なんじゃこりや　　！！」

「るっせえ・・・だから、言つたろ。爆発したって。」

「何が！？」

「キルルがに決まってるだろうが」

ケロロが見渡すとそこは更地になっていた。いくらキルルに破壊されていたとはいえ、ここまでにはなっていなかったはずだ。

「まあ・・・偽物の町なんだしいじゃねえの？」

「ま、まあそうでありますが・・・」

「しっかし・・・よく、無事だったな・・・俺達・・・」

ノラは煙草を吸いながら言う。即座にそれはケロロに没収され、折られた。

「ふっ・・・偶然だと思うか？最後の最後でいいところ取りだったな・・・」

・マジヨジョ」

「あれー？バレてた？さっすが、ギーくん」

マジヨジョが瓦礫の中から現れた。

「何時の間に・・・」

「いや・・・実は少し前から起きてたんだよ、大体・・・その人が剣を突き刺す時ぐらいにさー」

「なら言え！」

マジヨジョの言葉にハギギがつっこむ、後ろでバイルがハギギを抑えているのは見慣れている光景だ。

「頭が回転しなくてさー・・・って、兄さんは？」

「・・・」

クルルが無言でキルルがいたと思われる場所を指す。ガルルが誰かに向かつて名を読んでいた。

「・・・死んでるの？」

「いや・・・多分生きてるはずだろうな」

マジヨジョはそこに向かう。

「・・・マジヨジョか・・・」

「久しぶり・・・ガー兄・・・」

「マジジなら、この有様だ・・・」

「・・・。へ？子供・・・？」

ガルルが抱えているのはケロン人の子供だった。見た目ではタママより上のような気がする。だが、体色といい白衣といい。自分の兄しか思えない。

「ど・・・どうなって・・・？」

ケロロがぼそりと呟き、全員がクルルたちを見る。

「・・・勘だがノラの力のお陰だろうな。ノラが外から衝撃を与えたせいで本来内部爆発で済むところを外で爆発させた。だから、衝撃の負担がマジジにそんなに掛からず体を縮めるという現象でマジジは生き残った」

「なるほど・・・」

「くつくつく・・・これじゃ犯罪者として突き出すわけにはいかねえなあ・・・どうみたって、マジョジョの兄だとは信じてくれそうにもねえし、キルルも核ごと消滅したし、キルルが破壊活動してくれた偽者の町はその消滅のさいの爆発で更地になった。証拠はねえ」
「じゃ・・・！」

「まっ重要参考人としては呼び出しはくらうてありますがなあ・・・」
「まあ・・・そんなことよりも！帰りましようよ！ギロロも帰ってきたし怪我の手当てもしたいねっ」

ケロロの言葉をそんなこととして夏美が片付け、提案した。ケロロがイジケ始めたが全員がそれに賛同し、本物の奥東京市の日向家に帰ることにした。

「いててっ！痛えよっ！」

ハギギが足をじたばたさせながら、プルルの手当てから逃げようとした。しかし、プルルはしっかりとハギギの腕を掴んでいるので逃げることができない。

「この中であなたが一番重傷なのよっ大人しく手当てを受けなさい！」

「平気だつてっこれぐらいすぐに治るっ！」

「ギロロくんっ」

「ハギギ。ちゃんと手当てを受けろ」

「うっ・・・si・・・」

ギロロに言われ、渋々大人しくなるハギギ。ギロロも比較的他と比べて怪我が少ないので手当てに回っている。

「ケロロ。痛むところあるか？」

「大丈夫であります・・・次はギロロの番でありますよ？」

「へ・・・？い、いや、俺は怪我という怪我はしていないからっ」

「よいしょ」

ケロロがギロロの左腕を掴む。ギロロの顔が痛みで歪む。

「ほらぁ・・・やっぱり捻ってる・・・あん時でしょ？捻ったの」

キルルの攻撃を受けた際、ロギギと一緒に落ちてきた時のことだ。
「な・・なんでわかつたんだ・・」

「左腕を使わないように立ち回りをしてたり、庇っていたりしてたしね」

「そ・・・そうか」

まさか、気づかれるとは思っていなかったのだろう。焦りが見えた
「まったく・・素直に言いなさいって」

「し、しかし、他の奴らの方が怪我が酷いだろう。」

「相変わらずギーくんは優しいねー」

マジヨジョもガルル小隊の面々を手当てをしながら言葉をこちら
に向ける。

「優しくなどないと思うが・・」

「そこは自信を持つところでありますよ」

「むう・・」

「そういえばあの・・剣をキルルに突き刺してある意味いいところ
取り「テメエが言うなよ！」ハギくん、人の台詞遮らないでよーで、
その人どうなった？」

「ノラならきつといつもの公園の木の上にいると思いますよ」

そんな疑問にタママが答えた。ノラは日向家に帰還する際途中で
姿を消した。

「あいつは気まぐれでありますから・・」

「とんでもない気まぐれ屋だな」

「まったくであります・・」

ケロロとギロロの言葉で笑いが日向家から出てきた。

「ごめんなさい。俺のせいで」

その後マジジが目を覚まし、リビングで頭を下げながら言った。
マジジが代償としてなくなったのは子供になったことと左目の消失
だった。

「顔を上げる。マジジ。ギロロから聞いたお前は操られていたとな」

「だが・それでも俺が弱かったせいで操られたのには変わりはない」

「それに・俺もお前に謝ることが・・・」

「・・・は？」

ガルルのその言葉でマジジが素っ頓狂な声を上げる。ケロロたちがガルルがマジジに誤るようなことを言っただろうかと思ひ思案していると、ログギとギロロはわかっていてのか遠い目をしていた。

「じ、実はな・・・お前は本来死亡しているんだ・・・」

全体が一斉に静まったのは言うまでもない。いつの間にかノラもその話を聞いていた。

「・・・待て。待ってくれ・・・俺は生きているぞ？」

「いやな・・・お前、マジョジョの葬儀の夜、白衣を落としていないか？」

「・・・。あー・・・落としたかも・・・それがどうかしたのか？」

先ほどの空気はどこへやらというモノである。

「その白衣が川の近くで発見されてな、その白衣の中からこれが発見された。」

そういつて、ガルルが取り出したのは古い写真だった。

「これって、マジジたちだったんスね」

ガルル小隊は何度か見かけている写真である。マジジは言葉を出さないものどうしてそれという顔である。

「うわぁ・・・懐かしいねえーこれって、ボクのオリジナルと兄さんが撮った写真じゃん」

「無論、お前を探したさ、だが、見つからなかった。家にも居なかったからな・・・そうして、お前は居なくなってしまった。一ヶ月経つてもお前は見つからず軍や警察はお前が死亡したと決めた。戸籍上の保護者は俺達の両親になっているのは知っているだろう？親父達も諦めて、死亡届けを出したんだ」

「まさか・・・そんなことがあったなんて・・・」

ガルルの衝撃発言連発でマジジが固まっているのが見てもわかる。

ケロロたちが哀れみの視線を投じている。

「そ、その・・マジジ、スマン；；」

「い、いや・・ガルル達は悪くない；俺が失踪したのが悪いのだから；しかし・・死亡していることになっていようとは；」

「いったい、何が合ったんでありますか？」

ケロロの言葉でマジジが眉間に皺が寄る。

「・・・。マジヨジョの葬儀が終わって、その・・きっとガルルたちにとっては間抜けな話だが、川に落ちた；」

「・・・。はあ！？#」

「兄さん・・・；」

「俺も自分で恥ずかしいと思うって・・・呆然としていて、フラついて、足を滑らせて川に落ちたんだ。おそらく、その時に白衣を落としたんだと思う」

「思う？確認してねえのか？」

「お恥ずかしながら・・気が付いたのが翌日の朝だったから・・」
「・・・。」

無言ができた。マジジも自分がそこまで放心状態になるとは思ってもいなく、川に落ちて、白衣を落とし、翌日の朝、寒いと思い白衣を寄せようとしたらなくなっていた。無論探したがなかった。肩を落として家に帰ると電話が鳴ったんだ。

「電話だと？」

「ああ・・でも、変なんだ。相手の声を聞いたら眠くなって・・・なんって言ったかなどこかで聞いた組織名だと思うんだけど・・」

その言葉を聞いてロギギが夢のことを思い出した。ケルルにも言っていないかったギロロの後で会った話を

「アビリタ・・」

ロギギが小さく呟いた

全員無事（後書き）

ケロ：等々クライマックスでありますなっ！

ギロ：次回作も一応決まってるらしいのだが・・・

ケル：他ジャンルと混合だっけ？え・・・と、ぶりーち？っというんだよな？これ

ギロ：多分な。まあ・・・あくまでも予定だしな；

最終回 慌しい幸せな日常（前書き）

今回で最終回になります。読んでくれている方々ありがとうございます。
ました。それではどうぞ。

前の話で言っていた次回作については後日できれば発表したいです

最終回 慌しい幸せな日常

「そうそうっそれだっ」

「アビリタ・・・？・あれ？ギロ口・・・」

「ああ・・・あいつの所属している組織だな」

「あいつ？」

「あ・・・そっかケルルは知らないんでありますな・・・小隊メンバーの一人であります」

「・・・。んなのいた？資料で・・・」

「いねえと思ってるだが」

ケロ口の言葉でロギギとルククが話し出す。以前の戦いの際ケロ口小隊の資料は集めた。だが、ケロ口たち以外にケロ口小隊がいるとは知らない。

「まあ・・・一応非公開情報であります。彼女は色々兼業してるでありますし・・・」

今回の、前回の事件とも関わりを持たなかったが、詰問されるのは必須だろうと、ケロ口は思う。

「まあ・・・職務に結構忠実でありますから、いなくて好都合でありますかね・・・」

ケロ口小隊が渋顔になり、ケルルたちがそれでいいのかという表情をしている。そこでギロ口がボソッと

「あいつは頭が固すぎる」

「それ、先輩が言いますか」

「ケルルに同感」

「う、うるさいっ」

そして、カガガがマジジに続きを促せる

「まあ・・・ロギギの言う通りでアビリタ。って相手は言っていた。その後のことは記憶にはほとんどないのが現状だよ・・・」

「そのときだなマジジが操られたのは・・・」

「そうだな」

「あゝもうつ暗い話は終わりでありますっマジヨジヨたちが事情聴取から帰ってきてから考えるでありますよ!」

「・・・。ケロロらしいな・・・あ、ギロロ、今度、テメエいきなり団子、奢れよ?」

「いきなり団子をか?構わんが・・・」
「よしっ決定っ」

その夜は宴のどんちゃん騒ぎで日向家は笑いに溢れていた。

その途中、バイルはギロロに呼ばれた

「?何?兄貴・・・」

「お前の過去はケロロたちから聞いた」

「っ・・・ティオラが性能がいい・・・だから、博士も他の連中も皆あいつばっか構うようになった・・・あいつが来ると俺の居場所が無くなる」

そのバイルの台詞の途中でギロロはバイルの頭に手を置いた。

「・・・兄貴・・・?」

「俺には関係ないな。俺はバイルと言う一人の者として認めているし、仲間だと思う。それにここにいる奴は皆、お前の居場所を奪わん・・・ティオラもだ。」

「・・・っ／＼兄貴・・・かけえ／＼」

「?え?何か言ったか?」

「なんもねえよ／＼(俺、一生この人に着いて行こう・・・)」

「バ、バイルくん・・・」

「あ?」

「その・・・ごめんねっ追い掛け回して」

「なんだ・・・今更じゃねえか」

「うつ(グサツ)」

「・・・兄貴がいるし、いい。」

「バ、バイルくん・・・」

バイルの言葉でティオラの表情が明るくなり、それを見ていた保

護者の立場にある、ケロロとギロロが静かに微笑みながら見守っていた。まあその後クルルによって邪魔されたが

「あ、後・・ティオラ・・テメエ俺のことなんて呼んでやがる」

「へ？バイルくん・・・俺は女だ」・・・へ？」

バイルの発言により辺りは一気に静まった。だが、マジジたちは暢気に酒を飲み、マジヨジヨもギロロと会話しており、ハギギはそのマジヨジヨをギロロから離しており、カガガは暢気にその光景を見ていた。

「え・・？ええええ！？」

「るっせえ・・」

「なんだ・・お前ら知らなかったのか？ケロロたちはともかく、ティオラは知つとけよ。姉弟なんだしっ」

「だ、だって・・ずっと、男の子だと思ってたから・・」

「誰が、いつ、俺が男だつて言つたんだよ」

「だって、いつもジャージだし、口調は男の子だしっ！」

「設定した博士に言えよっ！」

姉弟が騒ぎ始めた。それを皆は驚愕していたがすぐに微笑ましく見守った

翌日ギロロにとっては衝撃がまっっているとは知らずに・・・（笑）

翌日、宇宙警察がマジヨジヨたちを重要参考人として、連れて行くための迎えが来ていた。マジジの左目には義眼が入っている。

「・・・なんだ？マジヨジヨ・・そんなに俺を見てもなんもならんぞ？・・」

マジヨジヨがギロロのことを凝視していた。

「ギーくん・・ボクはマジヨジヨのクローンだ。」

「・・？あ、ああ。どうした？」

その事実全員が知っている。だが、マジヨジヨは止まらず言い続ける。

「でも、ここにいるのはボクだ。ギーくん、言ったよね？ボクはボクだって」

「あ、ああ・・・？」

「ならさ・・・ボクが想っているこの、気持ちも嘘じゃないよね？／／」

「当然だ。お前が思っている事はお前の気持ちだろう」

二人が会話している中、ケロロたちが何かに気づいたのか、騒ぎ始めてカガガに止められていた。

「（？何をしとるんだ・・・？）」

「じゃ・・・さ・・・その想いを告げるのも、ボクの勝手だよね？」

「ああ。当然だろう？」

ギロロの顔は何を当然という顔をしている。マジョジヨは一度無言になった。

そして、急に顔を上げ、ギロロを引つ張った

「うお！？」

その瞬間、ギロロの唇にマジョジヨの唇があたった。

そして、離れた

「ギーくん、ボクは君のことが好きですっ従妹とか関係なく。一人の女としてキミが好きです／／」

「・・・。」

ギロロの啞然。

「勿論、負けるつもりはさらさらなによっ」

マジョジヨは夏美を一瞥し、ケロロたちを見やる。ケロロたちは石化していた。

「さっさと、マスターから離れるー！クソ魔女！／／／」

「わー・・・ハギくん、顔真っ赤」

「るっせえ！＃さっさと行けよっ！＃」

ハギギが怒鳴りながら、未だに近かったマジョジヨとギロロを離れた。

「じゃ！事情聴取行ってくるねー」

そういつて、マジジとマジヨジヨは行ってしまい、呆然としていたギロ口は・

「ギ・・ギロ口・・？」

「な・・な・・なああ！？／＼／」

ギロ口の叫びが木霊したのは言うまでもなく、その後ろで

「さつすが・・鈍感王・・言われるまで気づかねえか」

「先・・越されたでありますー！」

「マジヨジヨ殿なら安心でござる」

「そうですねえ」

各々の感想を言っていた。カガガはさらにその後ろで

「おお。やっと告ったか（笑）」

「なあ！？お前知っていたのか！？」

「あ？気づかねえ方がおかしいだろ」

ガルルの言葉をしれつと返すカガガ。

その後はてんやわんや、騒然としたのには変わりにはなかった。

戦場の赤い悪魔は仲間を護るために居場所から離れる。しかし、結局は彼の居場所はここだけしかないということだった。新たな仲間まで連れ。戻ってきた赤い悪魔は平和に時を流すのだった・

「アビリタ・・か・・何が・・目的だ？」

「さあな・・だが、今回のことと何か関連はあるだろうな・・」

騒いでいる後方でケルルとカガガが呟いているのはケルルの傍に居た、ロギギしか知らないのだった。

最終回 慌しい幸せな日常（後書き）

ケロ：せーのっ

全員：拝読ありがとうございましたっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4685v/>

超劇場版ケロロ軍曹 魔女と戦場の赤い悪魔との約束

2011年8月25日03時27分発行